

## 肉体改造エクスタシー ―全編サンプル―

カタン――。上野朔<sup>うえのさく</sup>は集合ポストのドアを開けた。

（ピザ屋さんに……新築マンション……ん？）

たくさん入っていたチラシ。一枚一枚目を通していくと、見慣れないチラシが目に残った。薄いティーシャツ姿の筋肉質な男性とダンベルの写真。どうやら近くにあるスポーツジムが新しい会員を求めているらしい。

（肉体改造かあ……）

一日体験無料の文字を見て、それだけを残して他は資源回収箱に入れた。

ピザも食べたいし、マンションだって買えるなら買っている。でも、どちらも先立つものがなければどうにもならない。

（スポーツジムもなあ……）

体は鍛えたいと思う。けれど、会員になるのは難しい。そう分かっている、つい懂れてしまふのだ。

ちよつと強く押し込むだけで折れそうなカギを回して部屋に入る。狭い玄関。二十五センチの靴を三足も置けばもう足の踏み場もない。

（お腹空いた……）

鍵をシューズボックスの上に置いて部屋に上がる。三メートルもない廊下を進めば、ベッドが部屋の半分を占めるワンルームだ。トートバックを下ろして床に座り、ベッドに寄りかかる。

（ええと……）

手にしたままのチラシを見る。そこには、

**肉体改造エクスタシー！**

**自分を変えたいあなたを特別ご招待☆**

**パーソナルトレーナーがあなたをサポート！**

**男性だけでなく女性の視線も気になりません！**

**怖いほどの快感と共に体を鍛えてみませんか？**

と、書かれていた。

（肉体改造エクスタシーって……）

最初の文言から思わず笑ってしまった。いかにもトレーニングを愛する男性向けの台詞。やはりジムは本格的に鍛えたいと思う人が行く場所なのだろう。

（別にお金かけなくたって家で腹筋とか腕立てならできるしなあ……）

――この思考はよくないよな、と普段から思っていた。いいなと思うものがあってもデメリット

トや代替案に目を向けて「いいな」と思ったことさえなかったことにする。これではいつまでたっても楽しい人生なんて送れない——そう分かっているものの、これが現実だ。お金に余裕のない生活。楽しい人生なんて夢のまた夢。

(あーあ……)

体験日は三日間あるようだ。そのうちの最終日は掛け持ちしているアルバイト先のどちらも店休日。これは神様が普段頑張っているご褒美にと与えてくれたものなのかもしれない。

(なあって……。もしご褒美をくれるなら宝くじ……。あーでも結局買うお金ないしなあ……)

一年前まではのんきな大学生だった。友達と遊び、アルバイトで月に数万円を稼ぐだけ。そのアルバイトだって同い年も多くて楽しくて、遊びのようなものだった。

今思えば、馬鹿だった。その頃にもっと働いて、遊びだけでなく貯金もしながら生活していれば今頃こんな貧乏な生活を送らないで済んだかもしれないのに。

両親は、一年前に突然死んだ。事故だった。幸いだったのは相手がいなかったことだろう。なぜかは分からないけれど、知り合いもない他県の山奥にある湖の中に車ごと沈んでいた。警察がタイヤ痕を調べたところ、落ちないようにと抗ったような形跡はあったらしい。だから、事故。

(……はあ……)

両親に何があったのかは分からない。しかし生命保険も解約済みで、通帳の残高もほとんどゼロになっていたことを考えると――。

(肉体改造エクスタシーかあ……)

脳筋なんて言われる人たちの中で必死に運動して汗を流せば、このぐだぐだした思考も一緒に流れていくのだろうか。ぼたりと床に落ちて、掃除員の目に留まるより先にモップが吸っていく――そんな風に、何もなかったようになるのだろうか。

(まあ、気分転換にはなるのかな……)

両親の死の一報を聞いてからのことはあまりよく覚えていない。でも、とにかく大変だった。両親が住んでいたアパートの退去、大学の退学手続き、そして、生計を立てられるような職探し。しかし大学は中退、車の免許も保証人もなしでは正社員になてなれなかった。

今は学生時代からしていた飲食店のアルバイトの後に、もう一か所、別の飲食店で働いている。でも家賃や生活費で給与のほとんどは消えてしまう。家には寝に帰る程度なのに――それでも自分の居場所があるというのは大事なことだ。いっそのこと風呂なしトイレ共有のもっと安いアパートに引っ越そうかとも思ったけれど、今はまだ引っ越し費用に貯金を使う勇気が出なかった。(自分を変えたいあなた、かあ……)

お金はコツコツ貯めていくしかない。食費についてはバイト先のおかげでほとんどかからないので、あとはいかにひっそりと生活するかがポイントだ。夏や冬は休日でもだらだら寝ずに家を出る。そして適切な温度を保たれた図書館で過ごす。それで電気代も生命も守られる。でも、それも少し飽きてきたところだ。子供の頃から本を読むことは好きだったので苦痛に思うことはないけれど、それでもやはり、たまには他のこともしてみたい。

(……一度行ってみようかなあ……)

こういうところは一体いくらくらいするのだろう。月額会員費というシステムなのだろうか。それとも行きたいときにフラツと行って、その日の分だけ払って使わせてもらうこともできるのだろうか。

普通、会員募集のチラシならそういうことも書いていそうなものだけれど、チラシを隅から隅まで読んでみても、お金のことは一切書いていなかった。高いから書けないのか、それとも一度体験すれば通いたくなると自信があるのか――。

行ったことがないので、ジムの経営戦略は分からない。でももしそれほど高くなかったら……今、貯金でできているのはせいぜい月に二万円。ジムに通う余裕がないことは分かっている。でも今より体力が増えたら、もう一か所掛け持ちだってできるようになるかもしれない。その分が結局ジム費用になってしまったとしても、自分を変えることができる。趣味や目標もなく、ただ生きることしか考えない日々から抜け出して。

(……とりあえず無料みたいだし……)

予約制ではないようだから、当日行きたくなったら行けばいいと床にチラシを置いてシャワーに向かった。

(ここか……)

チラシを手に、大きなビルの前で足を止める。スポーツジムというのだからもつとそれっぽい建物だと思っていたのに、外観はただのオフィスビルだった。

(……間違っていない、よな……)

宗形ビル。チラシにも、ビルの入り口横にもそう書かれている。もう一度住所を確認してから中に入った。

「いらつしやいませ」

「あ、あの、」

チラシを見てきました――そう言うより先に、ジムの入り口に立っていた男性の視線が朔の手に移った。

「ご体験ですね。ご来店ありがとうございます。どうぞこちらへ」

男性の後をついていくと、待合室のような、休憩室のような部屋に入った。ゆったりと座れそうなソファが数脚に五台の自動販売機。飲み物だけでなく軽食やタオル、お風呂セットまで売られている。

そして、何も置かれていない壁の前には七人の男性がずらりと並んで立っていた。全員ががっしりとした体格で、白地に紺色のラインが入った揃いのジャージ姿だった。

(トレーナーさんかな)

全員が高身長で、精悍な顔つきをしていた。年齢は二十代後半から三十代半ばだろうか。でももしかしたら精悍さゆえに若く見えるだけの人もいるかもしれない。あまりじろじろ見ては失礼だと思いながら、どうしても気になってちらちらと視線をやってしまう。

(すごい……)

全員が驚くほどかっこよかった。体型が好みだからとか、そういう理由で鼻屑目に見えてしまっているのかもしれないけれど、全員が魅力的。バランスの良い筋肉質な体系で、トレーニング雑誌に出てきそう。転んだときに支えてくれそう、なんて甘えた妄想をしてしまう。

(かっこいい……)

見ているだけで顔が赤くなってしまうようで視線を外す。軽食の自販機にカップラーメンが置かれているけれどいいのかな、なんて無理矢理男性陣から意識を逸らしていると、横から声を掛けられた。

「こんにちは」

「あ、こ、こんにちは」

突然話しかけてきたのは、並んでいた男性のうちの一人だった。右から……三番目にいた人。その人だけが列から出て朔の前に立っていた。

「本日担当させていただきます、トレーナーの南みなみと申します」

「南、さん」

短髪犬顔。髪色が少し茶色く見えるのは染めているからだろうか——いや、どうやら色素が薄いらしい。目もどちらかというと茶色がかった色。

「よろしくお願いいたします」

「あ、はい、宜しくお願いします。上野です」

「上野様ですね」

こちらにどうぞ、と言われて案内された先は狭い個室だった。狭いと言っても朔の住むワンルームよりも広い。そこに二人掛けのソファとテーブル、ウォーターサーバーが置かれている。

「どうぞお掛けください」

「ありがとうございます」

少し緊張してしまう。だって、こんなにかっこいい人と二人きりなんて——。

「では、こちらにご記入をお願いいたします」

渡されたクリップボードには一枚の紙が挟まれていた。一緒に渡されたペンを握り、項目を読んでいく。

(まずは名前と……)

あくまで無料体験だからか、住所や電話番号、生年月日を書く欄は見当たらなかった。ニックネーム可という気遣いのある欄に「上野朔」と本名を書き記す。

「……あ、あの」

「はい」

南はずっと正面に立っていた。それが礼儀や決まりなのかもしれないけれど、記入している間ずっと正面に立たれたままというのなんだか気まずい。

「座ってください」

「——ありがとうございます」

すぐに返事がなかったのは、おそらくこの部屋にある座れる場所が、今朝が座っているこのソ

フアしかなかったからだろう。でも二人は座れそうな長い形なのだから座ればいい。

(少し緊張するけど……)

「失礼します」

南が左隣に腰を下ろすと、思ったよりもソファが狭いことに気が付いた。朔が小柄で、南が思ったより大柄だったのだ。それに重い――筋肉が多いからだろう、南が腰を下ろした途端、そこから側の座面が大きく沈み、朔の上半体が勝手にそちらに傾いてしまった。

(やばっ)

腹筋に力を入れて姿勢を整えたけれど、今度は太ももが触れてしまうのではないかと不安になった。ゲイであり、南を好みと感じる朔にとってはご褒美だけれど、ノンケであろう南には不快なはずだ。

「あ、あの……」

「はい、なんでしょう」

かなり親しい友人なら気にせずにいられる距離。しかし南とは初対面で、明らかにパーソナルスペースの侵害をしてしまっている。でも朔が席を立てば、南に嫌悪感を抱いたと勘違いさせてしまいそうで。

「……身長はもうずっと測ってないのでだいたいなんですがいいますか」

「後ほど測定を行いますので、体重の欄も空けておいていただいてかまいません」

「あ、そうなんです」

意識を切り替えるために尋ねただけのつもりだったけれど、訊いてよかったなと思った。しかし、その次の欄を見て手が止まった。

「何度もすみません……このPサイズってなんですか」

「それはペニスです。そちらも後ほど測定いたしますので空白のまま結構です」

「……え？」

今、ペニスと――聞き間違いだろうか。身長体重が必要なのは分かるけれど、まさかペニスのサイズなんて。

「あの、すみません、えっと……？」

「ペニスです。男性器の」

「え、あの……」

しかも、それを測定すると言ったのか。

「あの、ここ、スポーツジム……ですよね？」

「はい。肉体改造エクスタシー……快感を得ながら効率よく体を鍛え上げる日本に唯一のスポーツジムです」

驚き過ぎて言葉が出なかった。肉体改造エクスタシーというのは、自分を追い詰めて楽しみつつ鍛え上げるということの比喻ではなかったのか。ぽかんとしていると、勧誘のタイミング得たりと思ったのか南が饒舌に話し出した。

「腹筋、背筋、腕立てにスクワット……家でもできるトレーニングはたくさんありますが、ジム

に通うことのメリットの一つは続けられることにあります。『会員費を払っているから』という気持ちで続けられる方もいらっしゃるんですが、『面倒臭い、飽きた、でも仕方ないからそろそろ行くか……』なんて気持ちでは体を動かしても爽やかな気分にはなれないでしょう。トレーニングはただ体を鍛えるだけでなく、ストレスの発散や自己肯定感を高めるためにも有効な運動なんです」

「は、はぁ……」

言いたいことはよく分かった。全て南の言う通りだと思う。しかし、だからといってそれがどうして快感に繋がるのだろうか。それにむしろ、ジムとしては会員費を払ってもらいながら利用率が低い方が儲けになるのではないのだろうか。

「私たちは、楽しく長く通っていたことを理念としています。そのため、会員様の体型だけでなく生活習慣や性格、趣味趣向も把握した上でその方に合ったアドバイスを行っていくのです。そのためにジムにお越しいただいていない日でも連絡を取り、食事その他のお話をお聞きます」

「すごいですね……」

そこまで理解してもらえたら、飴と鞭を上手に使い分けてもらえそうだ。

「はい。ですが、そうやって付きっ切りでサポートできるかどうかは結局ご本人にやる気があるかどうか次第なのです」

「そうですね、連絡さえ来なかったら何もできないですね……」

ふと、自分がトレーナーの立場だったらどう思うだろうか、と考えた。自分が担当している人が突然来なくなる。そのままずっと来てもらえない、連絡も取れない——自分に非があったと考えるだろう。途中で飽きてしまう会員が多いことを知っていても悲しい気持ちになる気がする。そう思うと、先ほどの「来ない方が儲かる」というのは失礼な考えだった。

得にここではパーソナルトレーナーがその人にあつたトレーニングの内容を考えてくれるようだし、なおさらだ。一所懸命考えたそれが全て無駄になるなんてとても悲しい。

「はい。そこで、どうやったらストレスなく通っていただけかを考えてつくったのが当ジムなんです。『そろそろ行っておくか』ではなく、今日も行きたい明日も行きたいと思っていただけのようなジムをつくらうと」

感じる熱意。本当にこの仕事が好きなんだなあと感じられる。

（いいなぁ……）

今の朔には、南のように仕事にやりがいや楽しみを感じる余裕は一つもなかった。とにかくただ毎日二つの仕事をこなすだけ。家においても疲労を溜めすぎないように、体調を崩さないように、寝坊しないようにと気を張って、財布の中身と睨めっこ。休日には夕方のタイムセールで安い食材を一週間分買って帰る。仕事が嫌いなわけではないけれど、とにかく仕事をミスなく終わらせることしか考えられていない。だから南が少しだけ羨ましく思えた。

「男性は——」

そこで南は言葉を切った。どうしたのだろうかとうと左を向くと、想像以上に近い場所に精悍な顔があつて驚く。咄嗟に平静を装ったけれど、驚いたことは伝わってしまっただろう。しかし南は体

を引くでもなく、逸らせなくなってしまった朔の目をじっと見ながら続けた。  
「快感が好きでしょう」

~~~~~

「――朔くんは、射精した後ペニスをどうされていますか？」

「え？」

「濡れた部分を拭いて終わりですか？ それとも出したものをきちんと自分で舐めて清めていますか？」

「え、え……あの、お風呂で流してます……」

そもそもオナニーをする場所がお風呂だ。ティッシュで拭くと亀頭にくっついてしまうし、もつたいない。それにお風呂なら息遣いが響いて、誰かと一緒にしていることを想像できるから。

「そうですか……では、流した後は？」

「え？ 普通に……体を洗ったりとかして……」

特別なことはしていない。仕事の後のシャワーの際に射精して終わる、それだけだ。

「分かりました。ではこれからは、きちんと労わってあげてください」

「労わる……？」

頷き、南が腰を上げた。どこかに行くのかと朔も腰を上げようと足に力を入れると、手で制される。

「そうです」

言いながら、南は朔の目の前に膝をついた。背が高いので、目の高さが同じになる。

「朔くんも、頑張ったときは『頑張ったね』『お疲れ様』と褒めてほしいと思うでしょう？」

「あ……」

思わず声が出たのは、凶星を突かれたからではない。単に、今南に褒められているような気持ちになっちゃったからだ。だって、言い方にすごく心がこもっていた。

「ペニスも一緒です。射精したら褒めてあげる、労わってあげる。そうして、たくさん射精できるように導いてあげるんです」

「導く……」

なんだか洗脳されているみたい。でも、南の声はスツと心に入ってくる。

「はい。ペニスに、頑張ったらもつと褒めてもらえるんだ、と覚えてもらうんです。朔くんがペニスをちゃんと褒めて育て上げたら、きっと一日に三回以上の射精だってできるようになるでしょう」

「あ……」

なんだか腰の辺りがむずむずする。普通、興奮するなら視覚や自発的な想像から始まることが多いのに、外から、なのに内部に向かって興奮を促されているみたい。

「いいですか？ 射精をしたら、ちゃんとペニスを褒めてあげるんですよ。言葉だけではなく、

撫でてあげるのもいいですね。そうやってたくさん愛情を伝えて……朔くんだって酷使されるだけではつらくなってしまうでしょう？ だから朔くん自身のことは私がたくさん褒めましょう」

「あ……南さん、が……？」

「はい。運動も、射精も、頑張ったらたくさん褒めます。トレーニングが終わったら体を流し、拭いて差し上げます。水分補給もして——ああ、ここではトレーニングが終わったら仮眠をとっていただくことができるんです。寝かしつけから起床までちゃんと私が付きっきりでありますので」

「睡眠までするんですか」

「そこまで手厚いのなら月額二十万円も領けた。きっとみんな、休日には朝からここで楽しくトレーニングをして、シャワーでさっぱりして睡眠をとって、まるで心身をリセットしたような気持ちで帰っていくのだろう。」

「はい。睡眠だけを目的にお越しになれる方もいらっしゃいます」

「すごい……」

シャワーも浴びられるし寝られるし……きつとここだと熟睡できるということだろう。聞けば聞くほど魅力的に感じてしまう。

「当然、最終的な目標は筋力を増やしていただくことなのですが、癒しの場としてもご利用いただけます。私どもも嬉しく思っております」

「なんだか溜息が出てしまった。なんて素敵な場所なのだろう。」

「さて……それでは、朔くんは一日一回、射精をされているということですね」

「あ、はいっ」

「そうだ、話を戻さなければ。領くと、南がまた隣に戻った。」

「オナニーの方法はいかがですか？」

「えっと……」

もう、回数もバレてしまったし——むしろ恥ずかしい発言は南の方がたくさんしているように思っていた。感覚がおかしくなっている自覚はあったけれど、普通とはなんだったか、すでによく分からなくなっていた。

「手でしてます。普通に」

「右手、ですね？」

「はい」

そう思ったのは右手でペンを持っていたからだろう。単純に利き手で扱う、というだけの話。「分かりました。では最後に、SかMか……虐められるのと虐めるの、どちらが好きですか」

「あ……どっち……かな……」

考えたこともなかった。恋人がいたこともないので、オナニーのときもそういう想像はしたことがない。

「お分かりになれませんか」

「はい……すみません」



「失礼ですが、今お付き合いされている方は？」

「いません。今までもいたことがなくて……」

そこまで言ってしまったら童貞だとバレてしまう。けれど、南相手なら何だって言えてしまうようになっていた。

「ではセックスのご経験は？」

「ないです」

「そうですか。ではペニスもアナルもまだ誰のことも知らないということですね」

「はい」

つい、普通に答えてしまった。異性愛者ならアナルという言葉に疑問を抱くはずなのに。

「承知いたしました。では……いかががいたしましたでしょう。今日は完全に見学のみになりますか？それともせっかくですから体験されていきますか」

「あ……えと……体験、してみてもいいですか」

頑張ったら褒めてもらえる。そう思ったら体験したくなってしまった。でもどう頑張ったってこの会員費が払える気はしないので、そのままさようならになってしまう可能性もあるのだけだ。

「嬉しいです。今日は一緒に頑張らしましょうね」

~~~~~

「では、失礼します」

「えっ！」

ズボンを脱いで終わりだと思っていた。それなのに、南は素早い動き——止める間もないくらい——で下着を下げた。

「っ」

ぼろん、とペニスと陰囊が外に出た。恥ずかしくて、足首から下着を抜かれている間に両手で陰部を覆い隠す。

「では、お預かりいたします」

畳んだ衣類を持って、南は部屋の端に置かれたロッカーに向かった。衣類がその中に消え、代わりに大きな器具が取り出される。

「こちらにお乗りください」

それは学校によくあるような身長を測定する器具だった。懐かしい気持ちになりながら乗って背筋を伸ばす。

「身長が——えー、百六十四センチ……ですね。では続いてペニスの測定ですが……まだ緊張されておりますね。ペニスサイズは勃起時のサイズが必要ですので、先に腸内洗浄をして体重を測定いたしましょう」

「え、え？」

「機械で行いますので、寝転んでいるだけで終わります。その間にお体を拝見して、少しずつ体を高めて参りましょう」

どうやら決定事項のようだった。今更やっぱり止めるとも言えず、言われるがままベッドに寝転がり横を向く。

「軽く膝を抱え、お尻を突き出すようにしてください」

恥ずかしい。けれど、南はこれが仕事なのだ。担当している会員みんなにしていることだし、その場数を考えれば医者に見せるのと変わらない。ただ、南が好みのタイプであるというところが引く掛かるだけで。

「はい、上手ですね。恥ずかしいでしょうに上手にできておりますよ」

「あ、ありがとうございます……」

本当に褒めてもらえるんだ、と何だか嬉しくなった。この調子で些細なことでも逐一褒められたら、きつともっと通いたくなってしまう。

「ではアナルを少しだけほぐします。うんちをするときのように少しだけいきんでみてください」

「はい……んっ」

「そうです、お上手です。アナルがぼつり膨らみました」

「っ……」

なんてことを——咄嗟に体から力が抜けたけれど、そのときにはすでに何かが体内に入り込んでいた。

「はい、力を抜いてかまいませんよ。ふーとゆっくり息を吐きましょう。はい、ふー」

「ふー……」

南はふー、ふーとずっと呼吸を覚えてくれた。それに合わせてゆっくりと息を吐き、体から力を抜いていく。

「とてもお上手です。さあ、指が一本、根元までしっかり中に入りましたよ」

「ゆ、指?!」

「ああ、止めずにゆっくり息を吐いてくださいね、ふー」

「ふ、ふー……」

驚きで体に入ってしまった力を再び抜く。目を閉じて、ゆっくりゆっくり息を吐く。

「——はい。中の温度や様子もこうして確認いたします。便秘はされていないようですね」

「はい……」

まさか指だとは思っていなかった。今朝排便があったからよかったものの、もし便秘のときだったら……と思うと背筋が冷える。

「このまましばらく待ちましょう。アナルが指の太さになじんだらお腹の中をきれいにして、体重を測って……もしアナルの感覚で勃起できるようなら、先にペニスのサイズも測ってしましましょう」

どう反応したらいいのか分からなかった。アナルで勃起なんてと頭では思いつつ、こうして南に体を見られ、褒められ、アナルに指を入れられていると思うと興奮してしまう。まだ勃起はし

ていけないけれど、ペニスはずっとむずむずしていて、今にも形を変えてしまいそうだった。

「……朔くん、息ですよ。ゆっくり息を吐きましょう。ふー……」

「ふー……」

息を吐き、体から力が抜ける度にアナルがひくつと収縮してしまう。まるで南の指の存在を感じ取るうとしているみたいで恥ずかしい。

「そうです、上手……ふー……ふー……ふー……」

「ふー……ふー……」

「いいですね、少しずつアナルが落ち着いてきましたよ。では指を抜きますので、そのまま……ふー……」

「ふー……」

指はゆっくりと抜けていった。何かがそこを抜ける感触というのは排便のときしか感じたことがないので、まるで南の前で漏らしてしまったような錯覚に陥る。

「うう……」

指と一緒に便まで出てしまっていないだろうか。いや、それもまずいけれど、南の指は確実に汚れてしまっているだろう——どうしよう。恥ずかしい。顔を見られたくない。

ぎゅつと丸まると、慰めるように南が背中を優しく撫でてくれた。

「頑張りましたね。あとは機械がしてくれますから大丈夫ですよ」

「うう……」

南は仕事、南は仕事、と頭の中で何度も何度も繰り返す。想像でしかないけれど、もし事故に遭って両手を骨折でもすればそのまま入院になって、看護師さんに下の世話をしてもらうことになるのだろうか——それと同じ、それと同じ……。

「——大丈夫ですよ。とても上手にできていました。では次は腸内洗浄のホースを挿入しますので、またちょっとだけいきんでみてくださいね」

「うう……」

もうしたくなかった。でもしないと。南は仕事……もしこんなところで帰るなんて言ったら、きつと気分を害してしまうだろう。それに、恥ずかしいと思いながらもここで止めたいとは思えなかった。

（強引にしてくれたらいいのに……）

自ら行動を起こすのは恥ずかしい。多分、それを分かった上で全て言葉で指示してくれているのだろうけれど、もういつそのこと無理矢理突き刺してほしい。それで、南が勝手にやったのだと、自分に言い訳させてほしい。

「朔くん？ 大丈夫ですか？ お尻が痛いですか？」

「あ……いえ……んっ」

黙ってしまったせいで南を不安にさせてしまった。申し訳ない、と心の中で謝罪しながらお尻に力を入れる。

「はい、上手ですね。ちゃんとアナルが膨らみましたよ」

「っ……………」

また言われた。二度目なのに――さっきよりも羞恥と興奮が増してしまっている。

「ああ、戻ってしまいました。もう一度んーっとしてください」

「んーっ」

指を入れられたことで緩んだアナル。そこに力を入れて……………なことになるだろうし、と不安だったけれど、今度はいきんですぐに何か硬いものがアナルにあてられた。

「はい、入りますよ……………はい、上手。ではゆっくり体から力を抜いて、ふ……………」

「ふ……………」

ここまで来てしまえば本当に病院みたいだ。受けたことはないけれど、大腸検査とか、そういうもの。

「ふ……………ふ……………」

「ふ……………ふ……………」

数回呼吸を整えると、ホースがゆっくりと奥に向かって進んできた。

「っあ、」

「朔くん、ふ……………」

「ふ、ふ……………ふう……………」

太い。どうやら最初は細く、それが徐々に太くなっていつているようだ。ホースが中に進むにつれて少しずつアナルが拡がり息苦しくなってくる。

「ふ……………そう、上手です……………ふ……………」

「ふ……………ふ、ふ……………ふ……………」

もう頼れるのは南しかいなかった。必死に呼吸を合わせ、体から力を抜いていく。

「上手……………はい、そのままゆっくり息をしてくださいね」

ホースの動きが止まった。カタン、カチャ、という軽い音が続き、それから今度は腰の辺りを撫でられた。

「では腸内洗浄を始めますね。温かいお湯が出て、それが吸引されて……………というのを数回繰り返します」

「はい……………」

「痛くないですよ。お腹が温かいなあって感じられると思います」

「はい……………」

不安だった。だって腸内にお湯を入れて、しかもそれを吸引されるなんて。でも、南の「ふー」という声に意識を向けているだけで、いつの間に体からは勝手に力が抜けていく。

「そう、上手……………はい、では始めます」

カチ、という音が聞こえた。それから機械の低音が室内に響き、徐々にお腹の中が温かくなっていく。

「あっ、あっ」

気持ちいい。お腹の奥が勝手にぼかばかしていく。

「気持ちいいですね……たくさん気持ち良くなりましうね」

「あっ……！」

南の手がお腹に触れた。そしてまるでお腹に自分の子供がいるかのように優しく撫でる。

「温かいですね……気持ちいいね……？」

「んっ、きもちっ……」

抜けた敬語。それがまた快感を高めていく。まるで、南と親しい関係になったような錯覚に陥る。

「朔くん、ふー……ふー……」

「ふー……」

「そう、いいこ……上手ですね。ふー……」

「ふー……」

お腹を撫でる手と穏やかな声に浸っていると、お腹の中からゆっくりと温かみが消えていくのが分かった。

「あっ……」

そして、重みも消えていく。

「あっ、あっ」

「大丈夫……今お腹の中をきれいにしていますからね……またすぐ温かいのが入ってきますよ」  
子供に言い聞かせるような話し方だった。まるで可愛がられているみたいでお腹だけでなく胸まで温かくなっていく。

「あっ……きもち……」

「朔くんはお腹の中が温かいのが好きなんですね」

「んっ……、そうみたい、です」

でも、なんだかさつきよりお腹が重く、苦しい。

「少しずつお湯が増えていきますよ……大丈夫、痛くない……痛くない……ふー……」

「ふー……」

もう完全に南のペースになっていた。さつき初めて会ったばかりとは思えないほど信用しきつてしまっている。

「そう、上手……はい、では一度お腹を空っぽにしましょうね」

「あっ……」

お腹が軽くなっていく。寂しい――。

「やあ……」

「ん？ 可愛い……お湯を取られちゃうのが嫌ですか」

「っ……」

つい子供のような声を出してしまった。もう大人なのに恥ずかしい。

「すみません……大丈夫です」

「ダメですよ。感じたことは全てちゃんと教えてください。お腹のお湯がなくなってしまうのは寂しいですか？」

南にはなぜか、逆らえない空気があった。言うことを聞きたい。そして、ちゃんとできたら褒めて欲しい――。

~~~~~

「最初にご案内するのはストレッチルームです。支度を終えられたらまずこの部屋で体をしっかりと伸ばして準備体操をしていただきます」

説明を受けながら廊下を進み、開けてもらった部屋に入ると、目の前に広がった世界に驚いた。  
(わ……………！)

南の言う通り、本当に裸の人がたくさんいたのだ。けれど全員がそうというわけではない。裸の人は必ず誰かと一緒にいて、その相手は全員ジャージを着ていた。南と同じデザインの人も、別のデザインの人もいる。おそらく同じデザインはトレーナー、別のデザインはSコースや特別コースの人なのだろう。

「どうぞ」

「し、失礼します……………」

部屋の広さはテニスコート程だろうか。手足を大きく伸ばす場所だと思うと狭いような気もするけれど、広すぎないせいか全体を見渡すことができる。

「こちらに」

導かれるまま空いたスペースに移動すると、南はマットを取ってくると言って部屋の奥にある戸棚に向かって歩いて行った。その間、つい気になって室内を見回してしまう。

(すごい……………)

あまり人のことをじろじろ見てはいけないと分かっているのに、どうにも目を逸らすことができなかった。だって、若い男性がたくさん裸でストレッチをしているのだ。

「もつと……………もう少しペニスを見せつけてみましょうか」

「やあんっ！」

すぐ隣から聞こえた声。視線を向けると、二十歳くらいの男の子が全裸で大きく足を広げている。その後ろにはトレーナーがいて、男の子に声を掛けている。

「もつと……………そう、もつとおちんちんを見てって言いながらしてみましよう」

「ああんっ！ おちんちん見てえっ！」

思わず……………本当に無意識で見てしまった。

(わ……………！)

見せつけるように開かれた足。その根元には、びよこんと勃起したペニスがあった。

「はい、ではゆっくり息を吐いて……………ふ……………」

「ふ……………」

「そう、いいですよー。おちんちちゃんと見てもらえていますよ」

「えっ！」

「あっ！」

トレーナーはこちらを見ていなかったはずなのに、どうやら朔の視線に気付いていたらしい。逃げるように顔を背けると、その先にはまた別の男の子がトレーナーと共にストレッチを行っていた。

「んっ……」

「息を止めてはいけませんよー……ふー……」

こちらでは、大きく足を広げた状態で上体を前に倒していた。しかし、なぜか太ももの間には小さな台が置かれ、男の子の背後に膝をついたトレーナーが男の子を後ろから抱きしめるようにして台の上に手の甲をのせている。

「ふー……」

「そう上手……もう少し……」

「ん……ふー……っあ！」

男の子が苦しそうにしながらも体を前にぐっと倒した。そのとき、どうやらトレーナーの手に男の子の胸が触れたらしい。男の子が嬉しそうな声を上げた。

「あんっ！ あっ」

「こら。おっぱいを擦りつけてはいけませんよ」

「やあんっ！」

ダメだと言われているのに、男の子はもじもじと体を揺らした。会話を聞きさえしなければ、トレーナーが上体の角度を調整しているだけと思えたのに――また目が離せなくなってしまう。

「あんっ、あっ、せんせえ……！ おっぱいくりくりしてえ！」

「ダメですよ。今はストレッチです。股関節を柔らかくしないといつまで経っても見せつけセックスができるようになりますよ」

「やだあっ！」

――見せつけセックスとは何だろう。でも、なんとなく分からないでもない。

（すごいえっち……）

もう、その言葉しか浮かんでこない。だって、こんないやらしいストレッチがあるなんて。

「――朔くん、そろそろ朔くんもストレッチを始めましょうか」

「っ?!」

突然の声に振り向くと、すでに床にはマットが敷かれていた。

「ほら、もう裸なんて気にならなくなったでしょう」

「あ……」

そういえば、自分も今いやらしい恰好をしているのに、見るのに夢中ですっかり忘れてしまっていた。

「さあ、朔くんもえっちで気持ちいいストレッチをしましょうね」

座るように言われ、マットにペタリと腰を下ろした。すると、まずは身体の硬さの確認をされると言われた。真つすぐ足を伸ばしたまま、ぐーっと手をつま先に向ける……が、掠りもしないところで止まってしまった。

「硬いですね……」

「すみません……」

「いえ、日頃からしていないと体はどんどん硬くなってしまいますからね。これからは毎日ご自宅でも五分ほどストレッチを行ってください」

「はい」

かなり——普通ではないジムだなと思っていたけれど、どうやらアドバイスについては一般的なようだ。痛みを感じない程度にゆっくり伸ばすようにという言葉に頷きながら体をほぐす。

「伸ばしているときはゆっくり息を吐いてください。腸内洗浄をしたときのように」

「なんつ……」

こんなところでそんなことを——しかしそんな焦りの理由だってお見通しのようなだった。

「みなさん同じですよ」

「え？」

「裸でストレッチをしている方はみなさん腸内洗浄を済まされてからここに来られていますのど」

「そうなんですか？」

「はい。ストレッチが終わりましたらこのままトレーニングルームに移動しますので、特別な事情がない限り、準備を全て終わらせてからのスタートになります」

「……」

つい、「分かりました」と言ってしまうようになった。けれど到底正規会員になてなれないし、無料会員になったところで二十万円分の手伝いができるとも思えない。となると、今日が最初で最後なのだからこのシステムを覚える必要はないし、覚える気があると思われる、南に無駄な期待をさせてしまう気がした——丁寧に案内してくれる南には本当に申し訳ないけれど。(……営業ノルマとかあるのかな……)

もしそうなら本当に時間の無駄になってしまう。けれど、もうその話は何度も繰り返した後なのだ。これ以上言うのはしつこいだろう。

「さあ朔くん、ゆっくり息を吐きながら体を伸ばしていきましょう。ピンクの可愛い下着をたくさんの人に見てもらいましょうね」

「っ……あっ……」

南の言葉のチョイス。そして周りから聞こえてくるいやらしい言葉。ダメなのに、ペニスが勃起を始めてしまう。

「ペニスも体を伸ばし始めましたね」

まるで今日はいいい天気ですねとても言うような口調でそんなことを言われ、顔が爆発したように熱くなった。しかし、周りを見ても朔を見ている人は一人もいない。



「大丈夫ですよ。みなさんえっちな気持ちで他人を気にする余裕はありませんから。朔くんも早く周囲の目が気にならないほどえっちな気分に入り込めるようになりましょうね」

それに頷くべきかは分からなかったけれど、無視するわけにもいなくて。でももし……もしここに通えるような財力があつたら、きっと素直に頷いていただろうと思う。

「恥ずかしいです……」

無難な返事。しかし、南は「大丈夫ですよ」と言った。「朔くんならちゃんとたくさん気持ち良くなれますよ」と。

「気持ち良く、ですか」

「はい。ストレッチ自体も体が伸びる気持ち良さはありますが、裸で、恥ずかしいところを人に見てもらいながら過ごすという快感を覚えられれば、人の視線だけで射精だってできるようになります」

「や、え、嘘……」

見られているだけで射精なんてできるはずがない。しかしトレーナーの南が言うのなら——いやでもまさか、そんなことって。

「できますよ。まだ信じられないかもしれませんが、見られている興奮だけで射精できる人もいます。当然誰にでもできることではありませんが、朔くんはそれができるようになる方だと、私は思っています」

（僕が……？）

どうして南はそんな風に思うのだろう。まだ会ったばかりで何も知らないというのに。

「……さあ、もう一度足を——」

おしやべりによって中断されていたストレッチの再開を促されたとき、視界の端でドアが開いたのが分かった。つい、なんとなくそちらに目を向けてしまう。

（あれ？）

入ってきたのはジャージ姿の男性だった。体格もいいのでトレーナーの一人だろうかと思ったけれど、南たちが着ているのとはデザインも色も違う。

（お客さん……？）

「あの、」

視線だけで問うと、南は小さな声で教えてくれた。

「ああ、あちらはSコースのお客様です」

男性はきよろきよろと室内を見回していた。どうやら誰かを探しているらしい。そして目当ての相手を見つけたようで、嬉しそうに顔をほころばせながら朔の方に歩いてくる。

（え……？）

まさか知り合いじゃないかな？ と不安に思っていると、どうやら朔の隣で開脚している男の子が目的だったらしい。目の前に膝をつき、優しい笑顔で声を掛けた。

「タツくん、お疲れ様」

「あつ、小久保さん！」

タツくんと呼ばれた男の子も嬉しそうだった。恋人同士なのだろうか。

「タツくんの小さなおちんちん、遠くからでもすぐに分かったよ」

「やだぁ……」

全然嫌と思っていない声。けれど、その声は不快感を覚えるどころか可愛らしく聞こえる。

「でもみんなに見てほしいから、おちんちんを出したまま大きく足を広げているんでしょ？」

「違うもん、ストレッチだもん……」

ずいぶん幼い話し方だ。でも嫌味じゃない可愛さがある。小久保と呼ばれた男性も嬉しそうだ。きつと可愛くて仕方がないのだろう。

「ほら、もうちょっと頑張って足を広げてみようか。もっとよく見せて」

「んっ、見てくれる？」

「もちろん。そのために来たんだよ」

「ん、嬉しい……見て、小久保さん、僕のおちんちん見てっ！」

つい、朔までそちらを見てしまった。けれどタツも小久保も、朔の視線には気付いていない。

「よし、上手におちんちん見せつけられたね。もうブリッジはした？」

「いえ、まだこれからでございます」

小久保の疑問に答えたのは、タツに付いているトレーナーだった。その返事に小久保は満足げに頷き、タツのペニスを一撫でして言う。

「タツくん、次はブリッジが見たいな。今よりもっとたくさんおちんちんを見せてみて」

「あっ……でも……」

「ん？」

「あの……」

「ああ、よしよしと。ペロペロどっちがいいか、かな？」

「は、はいっ」

よしよしとペロペロとは一体何だろう。ペロペロは舐めるという意味だろうと分かるけれど、よしよしは何なのかは分からない。

「タツくんはどっちがいい？」

「……どっちも……」

小久保の問いに、真っ赤に染まるタツの頬。どうやらすごく素直な子のようにだ。

「よし、じゃあどっちもしようね。先によしよしにしようかな」

小久保が言うと、タツは少しだけほっとしたように頷いた。そしてマットに寝そべり、足を肩幅に開いて膝を立てる。

（えっ……）

全裸なので、もうそれだけでとてもいやらしい。勝手に視線が中心に集中してしまう。

「ん……小久保さん、お願いします」

「ああ、ちゃんと触れられるように頑張るんだよ」

「んっ……」

タツが苦しそうな声を上げながら腰を上げた。けれど体が硬いのか、なかなか思うように上がっていかない。

「頑張っ。もう少し」

「は、いっ」

だいぶ苦しそうだ。そういえば、自分もブリッジなんて最後にしたのは一体いつだっただろうと考える。もしかしたら朔はもうタツほど体を持ち上げることではないかもしれない。

「頑張れタツくん」

「んっ、あっ……」

タツがじりじりと手のひらと足裏を移動させていくと、少しずつ上がってくる。ペニスに向かって小久保が手のひらを伸ばした。しかし触れはせず、少しだけ距離を置いて止めてしまう。

「もう少し――」

「あ、あっ、ああっ！」

~~~~~

トレーニングルームは、廊下を挟んで正面にあった。ストレッチルームの二倍はありそうな広い室内には、ジムらしく、いろんな器具が置かれていた。しかし普通のジムではありえないはずの嬌声が響いている。

(すごい熱気……)

「あんっ、あっ、あっ、ああっ！」

「もう少し……あと三十秒……」

「やあっ！ もお無理いっ……!!」

「……はい、ではもう一度最初から」

「やあ……」

いやらしい声。「嫌」と言う声があちこちから聞こえるけれど、どの声も本当に嫌がっているようには聞こえない。

「朔くん、どうぞ中へ。トレーニングについてご説明いたします」

「あ、は、はい……」

とてもいやらしい空気。もしフェロモンが見えたら、きっと室内は濃いピンク色に覆われて見えなくなっていたことだろう。

「では手前から――」

南について行くと、最初のコーナーには一面にプレイマットが敷かれていた。そして一番手前のところには全裸の男の子が三人、M字開脚で陰部を露出しこちらを見ていた。

「南さん！ お疲れ様です」

「お疲れ様です」

南と男の子が挨拶を交わす。南は慣れているのか普通だけれど、つい陰部を意識して――自分

もほとんど同じ格好なのも忘れて――目のやり場に困ってしまふ。

「今日は体験なんです。お邪魔しますね」

「はい。こんにちは」

「あ、こ、こんにちは」

恥ずかしくないのだろうか。男の子は見られ慣れているのか、照れた様子は微塵も見られない。自ら膝裏に手を添え、大きく開いている。

「朔くん、ここは胸筋と上腕二頭筋を鍛えるスペースです」

南の視線を追ってマットコーナー全体を見回すと、二人もしくは三人組の男性たちが点在していた。

「Mコース以外のお客様はここでのペニスを使うかを選び、中に入ります」

「え、え？」

理解が追いつかなかった――でも、先ほどのストレッチを思い返せばおかしいことはでない……けれど。

「ああ、お一人来られましたね」

背後から男性が近付いてきたことに気付いた南がさつと体をわきに避けた。それに倣い、朔も場所を空ける。

「あ、南さんじゃないですか。おはようございます」

「おはようございます。トレーニングは順調ですか」

どうやら知り合いらしい。さりげなく下着を手で隠し、黙ったまま会話を見守る。

「ええ。ここに来るようになってから毎日が楽しくて。今日は見学の付き添いですか」

「はい。一日体験なんです」

そりゃあいい、と男性は朔を見て微笑んだ。

「きっとここが好きになるよ」

「は、はい……」

まだ何も分かっていない。でも、確かに男性の言うとおり、ここは素敵な場所だということだけは気付いている。

「今日はどの子にしようかな……」

男性は早速ペニスを選び始めた。足を開く男の子の前に膝をつき、吟味し始める。

「ああ、君は匂いを嗅がれるのが好きなの？」

「はい……スンスンされるとそれだけで勃起してしまいます」

何の話をしているのだろう――邪魔にならないよう横から覗き込むと、どうやら男の子は全員首からボードを下げているようだ。さつきはつい陰部に目がいつてしまい、その後すぐに逸らしてしまったので気付かなかった。

「ボードには特長が書かれています」

朔の視線に気付いたのか、南が解説をしてくれた。

「名前とペニスサイズ、射精までの時間、最終射精の日いち、潮吹き経験の有無と、ペニスの呼

称です」

「呼称？」

「はい。その子が感じる呼び方のことです。おちんちんと言われたい子や、クリトリスと言われたい子など、いろんな子がいますので」

（わわわ……）

すごい世界だ。でも今来た男性も、選ばれるのを待っている子もみんな楽しそうに見える。

「おや？」

男性が一番左に座っていた子に声をかけた。

「君はお潮の経験がないのか」

「はい……」

「興味は？」

「あるんですが、出なくって……」

「そう。じゃあおじさんと今日は練習をしてみようか」

どうやらその子に決めたらしい。嬉しそうに頷く男の子の手を優しく引いて、奥の棚に歩いていく。

「ここでペニスを決めたら、次は奥の棚で使うオナホールを選びます」

ここでのトレーニング方法がようやく分かった。オナホールを動かす動作で腕や胸を鍛えるということだろう――すんなりと理解してしまう自分が怖い。でも、そうとしか考えられなかったし、ここなら十分に有り得た。むしろもう、普通のトレーニング器具を使うと言われた方が驚いてしまうかもしれない。

男性たちを追うように歩き始めた南について行くと、棚には驚くほどの種類のオナホールが並んでいた。

「見た目や内部構造の違いの他に、大きさや重さもそれぞれ違うものを用意しています。一番軽いのは三百グラム。こちらはMコースの小柄な子がよく使います。対して一番重いのは五キロ。ペニスにはめているときに手が離れると大怪我に繋がりますので、こちらはトレーナー付き添いのときにしか使用できません」

くくく

ペニスが落ち着くのを待って、次に向かったのは大きな椅子だった。

「これ……」

テレビドラマで見たことがある。妊婦さんが苦痛に叫びながら座っていた椅子だ。

「こちらは腹筋台です」

「え？」

腹筋台……には見えなかった。どう見ても分娩台だ。台にはしっかりと左右に開いた足置きがついていたし、その前にはキャスター付きの丸椅子、横には背の低い棚がある。

「ここでは腹筋を鍛えることができます。いかがですか、腹筋」  
「えと……」

南は腹筋だと主張するけれど、どう見ても、やはり腹筋台とは思えなかった。

「百聞は一見にしかずですよ」

「……はい」

きつと、恥ずかしいことをさせられるのだろう。でもそんなの、もうした後だ。

（オナニー見られるより恥ずかしいことなんてないよね……？）

自分で快感を追う姿ほど恥ずかしいことなんてそうないだろう。もしこの台の上で足を開いたまま腹筋運動をすることになったとしても、オナニーに比べれば。

「では座りましょう。どうぞ」

まるでお姫様にするように南が手を差し出してきた。礼を言って左手をのせると、分娩台までエスコートしてくれる。

「怖くありませんよ」

「はい……」

少しずつ脈が速くなってきた。だって、足を開くのだ。きつと足元にある丸椅子には南が座り、近くからじつと陰部を覗くのだろう。いや、覗くとは言わない。だってそこが見えるように足を開くのだから、わざわざ覗く必要がない。ふっと視線をやるだけで、本来なら人に見せないようなところを見られるようにするのだ。

（早まったかも……）

オナニーと比べてどちらの方が恥ずかしいか、とは言えない気がしてきた。どちらも同じくらい恥ずかしい。

「ゆっくりでかまいませんよ」

南は始終丁寧だった。普通の椅子よりも高いからか、腰まで支えて座るのを待っていてくれる。

「ありがとうございます……」

鼓動が激しすぎて痛い。でもこれは恐怖ではなく興奮のせいだ。

「お尻や背中痛くありませんか」

「はい、大丈夫です」

「では足を」

自分でのせるのかな、と思ったけれど、南が持ち上げるようにしてのせてくれた――まるで南に足を開かれているようで興奮してしまう。

「股関節に痛みはないですか」

その質問は、きつと体が硬いことを知っているからだだろう。大丈夫と告げて、体から力を抜く。

「では椅子の高さを上げますね」

そう言っつて、南は分娩台の前に置かれていた丸椅子に腰を下ろした。そしてゆっくりと分娩台の高さが上がり始める。

（あ……）

高さが上がることに恐怖心はない。しかし、そのせいで恥ずかしい部分と南の顔が同じ高さになってしまった。

（丸見えどころじゃないっ……!!）

ペニスと陰囊、それからアナルももう見られた。でも、会陰は多分まだ見られたことはなかったはずだ。なのに今、そこも無防備にさらけ出してしまっている。

「あ……あ……」

「恥ずかしいですね……でも大丈夫ですよ。とてもきれいです」

そんなところ、何をもつてきれいと判断するのは分からない。でも南の声は穏やかで、無理矢理言葉を絞り出しているようには聞こえなかった。

「ではまずアナルをほぐします。それからボールを入れて、腹筋を使って排泄してもらいます」

「えっ……」

単に足を開き、陰部を露出したままよくある腹筋を行うというのではなかったのか。てっきり、そんなものだろうと思っていた。

「入れるボールはアナルの柔らかさに応じてサイズを変えますので大丈夫ですよ」

「あ……」

そういう問題では——だって、こんなに大きく足を広げたままお尻から異物を出すなんて。

「では始めます。指でほぐしますので、少しだけいきんでください。覚えていますか？」

「はい……」

それは準備の際にもしたことだ。でも、全然状況が違う。

「ではどうぞ」

カタンという軽い音がした。おそらくローションのキャップでも置いたのだろう。恥ずかしい——でも嫌ではない。嫌と思うことができない。

「んっ」

「はい、上手です。アナルがちゃんと膨らみましたよ」

~~~~~

「あ、はあんっ!」

「朔くん、ふーと細く息を吐きながら力を入れるんですよ」

「ふー……んっ!」

アナルには、直径五センチほどのボールを入れられていた。ボールといっても重いものではなくて、ピンポン玉を大きくしたようなもの。テニスボールのようなものでなくてよかったと思うたのは最初だけで、いざいきんでみると、重みのないそれはなかなか出口に向かってくれない。

「はあん——っ!」

「朔くん、」

つい、息を止めていきんでしまう。

隣に立つ南を見上げて謝る。

「うー……ごめんなさい」

「では私に合わせてくださいね」

南は左手をぎゅっと握ってくれた。そしてもう片方の手でお腹を優しくさすってくれる。

「頑張りましょうね」

まるで出産しているみたいだ。でも、そう考えると南は旦那さま――。

「わぁ……」

「ん？ どうしましたか？ お尻が痛みますか？」

「あつ、い、いえっ！」

南が旦那さまだったなら、なんてつい考えてしまった。視線を逸らしもう一度呼吸を整える。

「ふー……ふー！」

息を吐きながらいきむというのにはまだ慣れない。でも南がお腹を撫でってくれるので、その感触で腹筋を意識し続けることができた。

「はぁ……ふー！」

かなり腹筋に効くトレーニングだな、と思った。さっきのオナホールを使ったトレーニングでは筋力よりも快感ばかり気になったけれど、今のところ性感は得られていない。指を入れられたりいやらしいことを言われたりしたときは感じたけれど、ボールがまだ内部の一ヶ所に留まり続けているせいか、便秘のときのような不快感を覚えるだけだった。

「少し休憩をしましょうか」

「……あの、」

「はい、何でしょう」

休憩中は手を離されてしまうだろう――そう思ったのに、南は手を握ったまま、お腹も撫でたままで顔を覗き込んでくれた。

「もし出せなかったらどうなるんですか」

プロなのだから、そんなことにはならないようにボールサイズを考えてくれているはずだ。それに、企業としても問題が起きないように何か対策は考えてくれているはず……と思いつつ、あまりにも出せないのが不安だった。

（もしかしたらもっと筋力があるって思われてたのかも……）

いや、もっと筋力があると思われていたのではなく、思った以上に筋力がなかった、という方が正しいだろう。もしこの件で南を不安にさせていたら申し訳ない。

「出せなかったら……そのときは出せるまでずっとこうして一緒にいましょう」

「っ……?!」

手を出してくれるとか、実は空気が抜ける仕様になっているとか、そういった具体的な方法と言われるものと思っていた。なのに、しかも、そんな――。

「こうして、何日でも手をぎゅっとして、お腹をさすって……たまには姿勢を変えて、しゃがむ形でいきんでみるのもいいですね。そのときは転んでしまわないよう、私の首に腕を回しておい



てください」

「あ……あ……」

しゃがんでいきむ——しかも南に縋り付きながら……？

（いやいや、無理っ！）

そんなことできない。それに、そんなに時間をかけたら便だってできてしまうだろう。そうしたら運よくボールを出せたとしても……それだけでは済まされなくなってしまう。

「ボールが出せるまでずっとそうしてくっついていきましょう。一人になんてしませんからご安心くださいね」

「南さん……」

お腹を撫でる手が温かい。でも、ちゃんと出さないと。

「南さん、もう一度します」

「はい。頑張りますよ」

「うん、頑張って！」

「え？」

突然聞こえた声援。声のした方を見ると、オレンジ色のジャージを着た男性が陰部を覗き込んでいた。

「っあ、やつ……!!」

見られている。何も隠すものないそこを。

（いつからっ?!）

全く気付かなかった。ずっと近くにいたのだろうか。

「ゆっくりいきんでごらん。ちゃんと産めるよ。大丈夫」

「西場<sup>にしば</sup>さま」

（西場、さん……?）

三十代半ばだろうか。優しそうな顔。体はかなりがっちりしていて——なんだか消防士さんみたい。

「こんにちは、南くん」

南が担当してる会員さんなのだろうか。それとも南は全員のお客さんと知り合いなのか。

「この子は体験の子？」

「はい」

「そう。恥ずかしそうにしながらもずっとごく頑張ってるなあって見てたんだ。オナホールも、気持ちいいのたくさん我慢して偉かったね」

「あ……」

なんと答えたらいいか分からなかった。だってずっと見られていたなんて。幸い——と言っていいのか、朔自身、この空間の感覚に慣れていたようで嫌悪感はない。けれど南以外に褒められると戸惑ってしまう。

「——朔くん、さあ、いきんでみましょう。ボールが出せたら少し休憩をしましょうね」

「あ、は——」

「朔くんっていうんだ。朔くん、頑張って」

「はい……ありがとうございます」

悪い人ではなさそうだ。けれど今は南と二人にしてほしい——なんて言えるわけもなく。南を見ても、表情は変わらない。遠慮してほしいとも、このままいてほしいとも思っていないような——こういうのは良くあることなのかもしれない。特に無料会員を希望するMコースの会員はSコースの会員に好かれた方が経営的にもメリットがあるのだろう。

左には南、足の間にある丸椅子には西場がいる。恥ずかしい。これでは本当に分娩シーンだ。

「ふー……ん、はあっ……んーっ」

「そう、いいですよ……お腹にしっかりと力が入っています」

南がお腹を軽く押した。

「お尻はぱくぱくしてるよ」

西場の熱いほどの視線をアナルに感じる。

~~~~~

第一休憩室はトレーニングルームの入り口横にあった。しかし想像していた——自販機とベンチが置いてあるだけの——場所とは全く違い、なぜか全裸の男の子が左右にそれぞれ十人ほど並んでいる。

そこは縦長の造りで、ドアから入って正面、部屋の真ん中には細長いベンチが二列に並んでいた。そしてベンチを挟むように、部屋の右手側には椅子に座った男の子たちが自らの意思で足を大きく開き、ペニスを垂らしている。

対して左手側には先ほど朔が使ったような分娩台が十台。こちらは足置きに足をのせることで開き、陰部をさらしている。

（うわ……すごい……）

広い部屋に並ぶ向かい合った陰部。これはもう、男の子が並んでいるというより陰部の展示だ。「飲み物は彼らが出してくれます」

説明しながら南は右手側、椅子に座って足を開く男の子たちの方に向かった。

「出す……？」

しかし、彼らの近くに冷蔵庫はない。一メートル間隔で裸の男の子が並んでいるだけだ。いや、裸ではない。よく見ると全員、ペニスに透明のケースをつけている。

（これって貞操帯……？）

「あの、もしかして……」

「はい。おそらくご想像のとおりかと思います。ちなみに中身は水、スポーツドリンク、炭酸水、生です」

「……生？」

まさかお酒だろうか。今の「中身」という言い方からして彼らの体内に飲み物があることは間違いないようだけれど、それが体のどこだろうとアルコールはまずいのではないだろうかと心配になる。

「はい。生です。生……そのまま、という意味です。ビールではありません」

「っ…………?!」

(そういうこと?!)

まさか…………いやでも、ここにいる男の子たちのことを思えばお酒でなくて良かった……のだろうか。

「何になさいますか」

「あ、や、いえ……」

人の体内——しかも膀胱から出たものなんて例え水であっても飲むことなんてできない。でもそれを本人たちの前で口にすることもできず黙っていると、南が目細めて言った。

「朔くんは飲んでもらう方が好きそうですね。缶の飲み物がございます。何がよろしいですか」

「あ、いえ、大丈夫です、すみません」

自分のわがままで手間をかけたくはなかった。確かに喉の渇きは感じていたけれど、これは運動したからというより興奮したからだ。

「いえ、通常のもものもご用意しておりますから大丈夫ですよ」

「では……お茶をいただきます」

南から視線を外し、並んでいる男の子たちを盗み見る。みんな頬を上気させていて、飲もうとしない朔に不快感を覚えている様子はないけれど——そのときドアが開き、二人の男性が休憩室に入ってきた。慣れた手つきで壁に備え付けられた機械から紙コップを取り出し、それぞれ椅子に座った男の子の前に座る。

「せっかくですから、見学していきましようか」

どうやら普通の飲み物は部屋の隅にある冷蔵庫から取っていいものらしい。冷蔵庫のドアには「フリードリンク・ご自由にどうぞ」と書かれた紙が貼られている。南はまるで映画でも見に来たかのように朔に着席を促すと、冷蔵庫に向かった。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

差し出された缶を受け取り、並んでベンチに腰掛ける。

「ここでは好きなときに好きなだけ飲み物をお飲みいただけます。ちなみに一番人気は生なんですよ」

「生……」

いやらしい。尿をそんな風に呼ぶなんて。

「ああ、お二人とも生をご希望のようですね」

先ほど来た二人は男の子のペニスの先端を指でくすぐっていた。

「あっんっ、あっ」

男の子二人の嬌声が休憩室に響く。

「あんっ」

「出せるかな？」

男性は落ち着いた優しい声で訊いた。

「ゆっくりでいいよ」

そう言いながら、くすぐる指先を止めはしない。その様子があまりにもいやらしくて、見てい  
るだけでペニスが力を持ち始めてしまった。

「っ……」

それを隠すように背中を丸めてしまったからか、南がこちらを見た。

「ああ、されるところを想像してしまいましたか」

「や、いえ……」

そこまで想像が膨らむ前です、とは言えなかった。でも、もしあんな風に南にペニスを弄られ  
たら――。

「あつ、あつ、出るうつ！」

羞恥をごまかすように下を向いていると、男の子の高い声が上がった。思わずそちらに視線を  
向けると、男性がペニスから指を離し、ペニスの先に紙コップを添えるところだった。

（わ、本当に……）

まるでジュースサーバーのような扱い。男性の表情は見えないけれど、きつと嬉しそうにして  
いるのだろう。

「ああっ！」

ジョボボ……と強い音が聞こえた。出ている。男の子が尿道口をくすぐられ、男性の持つ紙コ  
ップに排尿させられている――そう頭の中で考えたら、ペニスが痛みを訴えた。イきたい。腹筋  
運動と休憩で一度は落ち着いたはずのペニスが解放を求めている。

~~~~~

トレーニングルームに戻ると、先ほどより人が少なくなっているように感じられた。パラパラ  
と人はいるけれど、順番待ちは発生しないようなほどよい混み具合。

「あの、みなさんお帰りになられたんですか」

「ああ……そうでした、そろそろ昼食の時間ですね。空腹時のトレーニングはよくありませんか  
ら、食事にはいたしましょう」

「あ、いえ、僕は帰宅してから食べるので……南さんだけでも」

食事と聞いて最初に浮かんだのはお金だった。念のためと思って少しは持ってきたけれど、こ  
んな高級なジムで出される食事ではドリンク代にしかないだろう。

「体験には食事も含まれておりますから。お口に合うかは分かりませんが、無料ですし、一食分

浮いてラッキーという気持ちで参りましょう」

もしかして、お金がないことを知っているのだろうか。それとも単に、入店の際に私服を見て貧乏だと悟ったのか。

（一応なるべく新しい服を選んだつもりだったけど……）

それでも買ったのは一年前……いや、二年前に買ったまま一着も新調していない。親もいない今、頼れるのは自分だけ。そう思うと極力節約して貯金に回しておきたかったのだ。アルバイト先には制服があったので、衣類の優先順位はとても低く、誰かと遊びに行くこともなくなったので外見なんて気にすらしていなかった。

（そういえば、南さんが来ているジャージも高そうだし……）

年二百四十万円もの会員費をいただくお店としては、安物は使えないのだろう。でもそれが似合っている時点で南自身にも高級感がある。

（世界が違う……）

そう思ったら、急に自分がちっぽけに見えた。食べるだけで精一杯の自分とは全く違う裕福な人たち。当然そこに至るまでにはたくさんの努力があったのだろうけれど、それにしただってあまりにも違いすぎた。

（……どうして僕はここにいろんだろう……）

惨めだった。ここは、自分がいていい場所じゃない。

「すみません、僕帰ります」

「え……？」

「あの、僕……えっと、」

急な感情の変化で、言い訳すらすぐには思い浮かばなかった。でも別に朔は客の立場なのだし、ここにさえ来なければもう二度と会うこともないのだから、取り繕わなくてもかまわないだろう。

「ごめんなさい、ありがとうございます」

「何か、気に障るようなことを――」

「いえ！ そんなことないです。あの、何ていうか……僕やっぱりお金払えないですから……」

親がいない、お金がない、たったそれだけのことでどうしてこう惨めな思いをしなければならぬのだろうか。でも、それが現実なのだから仕方がない。いや、親がいないというのはただの言い訳だ。確かに急だったけれど、もっと能力のある人はちゃんと稼いで自活している。

「だから、ごめんなさい！」

思い切り頭を下げると、困ったような、言いにくそうな声で南が言った。

「実は、知っていました」

「え？」

「……ここではあれですから、一度部屋に戻りましょうか」

今「知っていた」と言ったように聞こえた。ということはやはり、服装から察していたということだろう。

（恥ずかしい……）

足を開くのも、自分で快感を得ようとするのを見られるのも恥ずかしかった。でも今が、今日で一番恥ずかしい。きつとここに入ってきたときも、たくさん並んでいたトレーナーたちは心の中で笑っていたことだろう。もしかしたらすでに控室では笑い話になっているかもしれない。「場違いなのが来たな」「南はハズレを引いたな」なんて。

「こちらへ」

「あ……」

動こうとしなかったからか、南に手首を握られた。そしてその手はスライドして、手を――。

（子供だって思ったのかな……）

お世話になっておきながら突然帰るなんて、本当にただの子供のわがままだ。それなのに、南に触れてもらえるのが嬉しくて手を振りほどけずにいる。

連れられたのは、身体測定や腸内洗浄をした部屋だった。ベッドに座るように促されて素直に従うと、南もすぐ横に座った。

「不安に思わせてしまってますみません」

「え、いえ、南さんは何も……」

南が悪いわけじゃない。これは単に朔のわがまま——いや、くだらないプライドのせいだ。

「実は、チラシを入れたのは私なんです」

~~~~~

アナルは、戸惑うほどスムーズに南の指を受け入れた。

「上手です。この辺り……どうですか？」

「あっ！」

南の指先がどこかに触れた瞬間、ビリツとしたような刺激を感じた。さっきまでの刺激とは全く違う何か。

「やっぱり朔くんは優秀ですね。男の子はここで気持ち良くなれるんですよ」

「あっ、あっ」

刺激の強いところを、南は執拗に指先で揉んだ。くりくりと捏ねられ、太ももがびくんびくんと反応する。

「あっ、あっ、ああっ！」

「朔くん、朔くんの気持ちいいところはここですよ。覚えられましたか」

「あっ、あっ！」

まるで授業のように言われても、快感に支配されて全く頭に入っていない。

「朔くーん」

「あっ！」

指が止まった。真っ白になっていた頭が、徐々に思考力を取り戻す。

「あ……はあ……南さん……」

「朔くん、気持ち良くなれる場所がどこか覚えられましたか」

「え……場所……？」

そんなの分からない。今南が触ってくれたところが気持ちいいところだ、ということしか。

「そうです。今私の指はここにありますが、朔くんの気持ちいいところはどこですか？ 右？

左？ もっと奥ですか？」

「え、え」

（そんなことを言われても……!!）

全然分からない。だって、もうどこだったのか覚えていない。

「ごめんなさい、分かりません」

素直に謝ると南が笑った。

「朔くんは本当にいいこですね。では、今度はゆっくりそこに行きますから、一緒に覚えてみましょう」

「あっ!!」

南の指がずるりと抜けると、途端に大きな喪失感に襲われた。ただの指だと分かっているけれど、それでも交わりを解かれてしまったような気分。

「さあ、中に入れてください」

「あっ」

指がまた入ってきた。けれど、すぐにはさっきのところに行ってくれない。

「やあ……」

「さっきのところ、もっとしてほしいですか」

「はいっ……!!」

もうイきたかった。次は中の気持ちいいところを握ねながら、ペニスも握って刺激してほしい。

「じゃあ、覚えましょう。今はまだ、入ったばかりのところですね」

「はい……」

そんなことはいいから早く、と思ってしまった。でも南が覚えるように言ったのだから、覚えなくては。

「こうしてゆっくり中に入っていきますよ」

「あ、あっ」

「朔くん、ゆっくり息を吐いてください。快感に支配されると覚えられなくなってしまうですよ」

「あ……ごめんなさい」

今日何度も教わった呼吸法——実際には深呼吸を繰り返すだけなのだけれど、快感を拾うと途端にとっても難しいことのように思えてしまう。一度気持ちを落ち着けるために瞼を閉じて、南の

「ふー」という声に合わせて息を吐く。

「そう、上手です。ではそのまま、今度はお尻の中に意識を向けてみましょう。私の指があるのが分かりますね？」

「はい……南さんの指、僕の中に……」

「ええ。朔くんのお尻の中はとても温かくて、きゅっと締まっていてとても気持ちいいですよ」  
「や……」

恥ずかしい。そんなところ、自分では見たことも触れたこともないのに、南に知られてしまっている。

「朔くんはお尻の中もとてもいいこです。では、そのまま意識しててくださいね。さあ、奥にいきますよ」

「あ、あつ……ふー……ふー……」

「いいこ……」

褒められる悦びに浸りながら、頭にお尻の中をイメージする。とろとろに光ったピンク色の筒の中に南の指が二本、ゆっくりと奥へ進んでいくところ。

「さあ、もう少しですよ。このまままっすぐ行けば、朔くんがたくさん気持ち良くなれるところです」

「んっ、はいっ、覚えましたっ」

だからもう焦らさずにぐりぐりしてほしい。さっきより強く、射精するまで弄ってほしい。

「はい、ではトレーニングルームに参りましょうか」

「……え？ や、」

さっきのいじわるの続きだろうと思った。だって、こんなタイミングで移動だなんて。なのに指はスツと抜かれてしまつて。咥えるものを失ったアナルはひくひくとその存在を求めて動いている。

「ここから先は朔くんがトレーニングを通じて自分で気持ち良くなるんです。さあ、起きましようね」

手首を引かれ、上体を起こされてもまだ信じられなかった。だってすごく気持ち良かったのだ。あとはこのままペニスも弄ってもらつてそしてそのまま——という気分になんてなっていた。なのに場所を覚えるように言われ、最後にはそこに触れてすらもらえず終わりだなんて。

「さあ朔くん、行きましょう」

~~~~~

「おちんちんがいいですっ！」

「分かりました。もう限界なんですネ」

よかった、分かつてくれた。そう思ったのに、案内されたのはデイルドのついた台だった。

「え……？」

「今ペニスを使ったら射精してしまうでしょう。そうしたら体験は終わってしまいます。苦しくてつらいでしょうが……でも我慢した分、あとでたくさん気持ち良くなれますから」

「あ……や……」

もうこれ以上我慢するなんて無理だ。おかしくなってしまう。確かに、もっと南と一緒にいた



い。みんなに見られながらというのは恥ずかしいけれど気持ちいいし、何より今後もう経験することはないだろうから——でも、とにかくもうペニスが限界なのだ。

「やだ、や……」

助けてほしい。ペニスが壊れる前に許してほしい。でも一緒にいたい……でも壊れてしまいう。

「おねが……」

しかし南は「お尻の中を擦りたくありませんか」と提案するように言った。

「お尻のむずむずが治るかもしれませんよ」

「あ……」

ここまで言って許されないのなら、きつとこれ以上言っても無駄だ。それに確かにお尻のむずむずもひどいし、そちらだけでも落ち着けば、ペニスも楽になるかもしれない。

「……分か、りました……」

南の視線が朔の足元に移った。デイルドだけでなく、台も様々な高さがあるようなので、朔に合う高さを確認したのだろう。しかし、このデイルドつきの台をどうやって使うのかは想像もつかない。

（空気椅子……とか？）

お尻にデイルドを入れながら体勢を保つのは厳しそうだ。でもアナルを拡張られる快感を知ってしまった今、してみたいとも思ってしまう。

「では準備いたしますのでお待ちください——ああ、あちらでトレーニングされていますね。先に見学しましょうか」

南の視線を追ってみると、そこにいたのはオナホールコーナーでトレーナーに向かってペニスを扱っていた男の子だった。ぼろぼと大粒の涙を流しながらスクワットをしている。

（スクワット……！）

空気椅子ではなかった。でも、スクワットとどちらの方が楽だろうか考えると……全く分かっていなかった。

南に呼ばれ、少しだけそちらに近付く。やはり男の子はあの子だった。まだいるということは、あれからずっと射精はさせてもらえていないということだろう。

（かわいそう……）

射精させてもらえていないのは朔も同じだけれど、朔は体験ということで説明にも時間を取られている。この子のようにずっとプレイしっぱなしというわけではないので、朔の方がいくらかマシ——そう思いながらも、やはりつらいのは変わらない。でも朔でさえこれほどつらいのだから、この子はどんなにつらいだろうかと考えるとかわいそうになった。しかし、動けば動くほどつらくなるだろうに、男の子は必死に体を動かし続けていた。

「あああつ！」

「さあ、あと三回ですよ」

「やあんつ！ あ、もうっ、もう無理ですっ！」

太ももが震えているのが朔にも分かった。完全に限界。しかし朔より近くにいて、その震えにも当然気付いているはずのトレーナーは楽しそうに目を細めていた。

「あと二回……つらいと言いながら、ペニスは萎えていませんよ」

「やあんっ！」

悲鳴の中に含まれる甘え。でも苦しいのは確かだろう。

男の子は必死に腰を上げるけれど、力が入らないのなかなか上がりきらない。

「さあ頑張つて……もし失敗したら結腸まで犯されてしまいますよ」

「やだあっ！」

(すごい……)

もう立っているだけでもつらいだろうに、男の子は必死にトレーニングを続けようとしていた。本当に無理ならばそのまま前に倒れてしまえばいい。なのに、齒を食いしばってトレーニングを続けている。

「やあ！ あああ！」

最後に力を振り絞るように男の子がぐつと腰に力を入れたとき、朔たちの視線に気付いたのか、トレーナーの男性がこちらを向いた。

「——あ、南さん。体験の方ですね。どうぞこちらにいらしてください」

南を見ると、エスコートするように腰に手を添えられた。そのまま近付き、一メートルの距離からの見学。

「やあっ！ 見ないでえ……あ、あ、だめ、だめえ、あああああ！」

朔たちの存在で集中が切れたのか、男の子は後ろに転んでしまった。太いデイルドがずずずつと入り、台にぺたりとお尻をつけてしまう。

「ああああああ！」

ビクンと男の子の体が跳ねた。その衝撃で状況を理解したのか、男の子は呆然とした表情で涎を垂らし、勃起からはどろっとした粘り気のある白濁をこぼした。

「ああ、イってしまいましたね」

トレーナーがしやうがないな、とでも言わんばかりの息を吐いた。でもその顔はとても優しくて。

「大丈夫ですか」

トレーナーが声を掛けても、男の子は反応を示さない。大丈夫だろうか——しかし、トレーナーは焦ることなく優しい手つきで頭を撫でた。

「頑張りましたね。でも、今日も目標未達成です。また一ヵ月、オナニーは我慢しましょうね」

~~~~~

「コーヒーをお出しします」

「ああ、ありがとう」

まさか、と思った。そしてそのまさかはそのとおりで、テーブルの上で四つん這いになったウエーターのペニスを客の男性が握った途端、その先端から黒い液体が飛び出した。男性はその下で持ったカップにコーヒーを受け止めている。

「あっ……」

「よく出てるよ。熱くないかな」

「は、いつ」

ジョボジョボという音は朔のところまで聞こえてきた。

「あ、あっ」

「気持ち良さそうだね。ミルクもちゃんと出せるかな」

「はいっ！ もう、ミルクっ！ 出したいですっ！」

「ああ、うん、いいよ。コーヒーはもういっぱいだ。先に一口飲ませてくれるかな」

「はいっ」

ウエーターの声が上ずっている。よく見ると、さつきは柔らかそうだったペニスが硬くなっている。

「うん、温度もちょうどいいよ。私は猫舌だからね。ここのコーヒーが一番適温だ」

「ありがとうございます……」

ウエーターのお尻が揺れている。その理由はもう朔にも分かった。イきたいのだ。ペニスを擦って、気持ち良くなりたい。

「おまたせ。ではミルクをいただくよ」

「はいっ！」

嬉しそうにウエーターが頷くと、男性はカップをペニスの下に置いて、刺激を求めるそれを握った。

「あんっ！」

「美味しいミルクを出してくれ」

「ん、は、はいっ！ あっ、あっ！」

（わ……！）

もしかしてミルクとは――精液なのだろうか。でも、そんなの絶対に美味しくない。それにミルクと砂糖と言っていた。どう考えてもコーヒーと精液、砂糖の組み合わせは不味すぎるだろう。

「あの、せ、精液入りのコーヒーを飲むんですか……」

南が「通常のコーヒー」を頼んだ気持ちが分かるなと思いつつ尋ねると、南は「いえ」と首を振った。

「彼の絶頂と共に出てくるのは精液ではなくコーヒー用のミルクです」

「え？」

「給仕前に尿道から特別なチューブを精管に挿入し、精子やその他精液のもととなる体液を可能な限り抜き取ります。そしてその代わりにミルクを入れるんです」

「わ……」

すごい技術だ。痛そう、と思うより先にそんなことが可能なのだろうかと思ってしまう。

「ああ、ほら、ミルクが出るようですよ」

「あああんっ！ あっ、あっ！ ミルクがっ！」

~~~~~

「はい、じゃあ次の子ー……あ、こんにちは。見学？」

「あ、はい、失礼します」

カウンターのうちのそのまた奥のドア。そこには白衣を着た中年の男性が丸椅子に座り、その近くに看護師らしい男性が立っていた。

「ああ、南さん。新しい子ですか」

「今日体験の子なんです。お邪魔しますね」

どうやら南は顔が広いらしい。親しげに話し、邪魔にならない場所に立たせてくれる。

「あの、ここは……？」

小声で尋ねると、どうやら医師にも聞こえたらしい。

「ここはね、まずはおしっこを抜くところ。コーヒーを入れるでしょ？ その前に膀胱の中を空っぽにするの」

「あ、そ、そうなんですか」

まさか医師自ら答えてくれるとは思わなかった。それにしても気さくな人だ。

「おしっこを抜くのは看護師の彼がして、僕はタマタマから精液を抜いて、ミルクを入れてあげるのがお仕事」

すごいでしょ、と言わんばかりの笑顔が可愛らしく、思わず笑いながら頷いてしまった。

「そんなことができるんですね」

言った後で失礼な言い方だったかもしれないと気が付いた。しかし気に障ってはいなかったように、むしろ嬉しそうに「そうなんだよ！ 難しいんだけどねえ」と笑う。

「先生、次の子入ります」

「ああ、うん、じゃあ、ちよつと見ててね」

まさかここに入職すると思われていたらどうしよう、と不安がよぎった。しかし、入ってきた人を見てそんなことは全て吹っ飛んでしまった。

「コータさん！」

「あれ、さっきの！ ここも見学？」

「はい。お邪魔しています」

「そっか」

コータは慣れた様子で看護師の近くにある簡易ベッドに横になった。すかさず看護師が尿道にカテーテルを入れていく。

「生の後ですね？」

「はい。多分出ないと思うんですけど」

「うーん……あ、ちょっとだけ」

朔のところからも、カテーテルの中に黄色いものが見えた。しかしそれはすぐに止まり、即座に黒い液体の入ったシリンジが添えられ、今度は黒いそれが中に入っていく。

「んっ……あっ」

「熱いですか？」

「いえ……温かい……」

「もう終わりますよ——先生、コーヒーの注入できました」

「はい。じゃあコータくん、こっちに」

「はい」

コータは下腹部を押さえながらも、歩いて先生の横にある分娩台に座った。ウィーンと軽い音を立て、座面が上がっていく。

「射精は？」

「今日はしてないです」

「ん、オッケ」

話しながら用意されたのは黒色のかなり細いチューブだった。それを先生がススツと尿道内に入れていく。

「あっ……」

「あれ、おしっこ抜くときは声出ないのに」

「こっちは怖いんですよ」

「大丈夫、優しくするから」

「そう言っている……っあ！」

楽しそうに話していたコータの声が止み、体が揺れた。眉間には深い皺が刻まれ、手はぎゅつと握られている。

「うん、苦しいね……」

同情するような、労わるような医師の声に、コータがコクコクと頷いた。

「コータくん、あと少し頑張りましょうね」

そう言ったのは看護師だった。尿の処理が終わったのか、コータの手を握り頭を撫でる。

「ううう……」

「うん、つらいね……でもあとちょっと……よし、じゃあ吸うね。体楽にして、ふー」

「ふー」

医師と看護師が「ふー」と声に出すと、コータは苦しそうにしながらも必死にふーと息を吐いた。

「そう上手……」

ズズズズズズ——。

「あああああ！」

嫌な音だった。いかにも吸ってます、という音だ。聞いているだけで鳥肌が立つ。

「あああああああああ！」

「苦しいね、つらいね……はい、ふー」

「ふー」

「ふ、ふっ……ふー……」

見ているだけでつらくなるような時間だった。けれど、実際にはそう長くはない。数秒で音が止むと、コータの呼吸が戻ってくる。

「はあっ……」

「コータくん、よく頑張りましたね」

「ん、じゃあ次はミルク入れるね。力抜いてねー」

「はい……あああああ！」

今度は悲鳴ではなく嬌声だった。でも入れているのは膀胱ではなく精管のはずだし——気持ちいいのだろうか。

「あっ、あっ！」

「コータくん、ふーしてね、ふー」

「ふ、ふー！ ふー！」

ここでも呼吸が大事らしい。看護師が必死にコータの胸や腕をさすりながら息のタイミングを伝えていく。

「ふー、ふー」

「ふーっ！」

（すごい……）

見ている限りはともえっちだ。だつて分娩台の上で大きく足を開いて陰部を露出しているのだ。しかも、大事なペニスは医師につままれ、小さな穴にはチューブを咥え込んでいる。

「あ、あっ」

「はい、もう終わるよー」

機械が止まると医師がスルツとチューブを抜いた。それがまた快感のようで、コータが悩ましげな声を上げる。

「あんっ、あっ」

「はい、おしまい！ 頑張ったね」

「はい……ありがとうございます」

あんなにつらそうだったのに、ペニスはもう上を向き始めていた。その中途半端さが逆に生々しい。

~~~~~

「おかえり」

即座に立江が立ち上がりコータに近付く。

「うう……おちんちん……」

「痛い？」

立江の声に、医師がコータに意識を向けたのが分かった。しかしまだ何も言わない。

「ううん……でも苦しい……」

その返事に医師の表情が緩んだ。

「ああ、すぐに楽になろうね」

ベッドに運ばれたコータはすぐに大きく足を開いた。きっと羞恥はないのだろう。「早くう」と甘えた声を出す。

「うん、すぐにちゅばちゅばしようね」

「んっ！ 早くちゅばちゅばしてえ！」

一体何が始まるのだろうか、とつい二人に見入ってしまった。恋人同士のやりとりなんて、見ないふりをするべきなのに。でも、いやらしい雰囲気があったのだ。

「あ、まだ先っぽにミルクついてる。上手にミルク出せたんだね」

「ん、出せたあ！ おちんぽからミルク出したからあ！」

だから、早くちゅばちゅばして――立江はパクリとペニスを咥えた。

「あんっ！」

そして亀頭だけを口に含み、言葉通り「ちゅば」と音を立てながら引き抜く。

「あんっ！ あっ、ああっ！」

立江は何度も何度もそれを繰り返した。口に含むのは亀頭だけで、竿の部分はペニスを指でつまんで支えるだけ。唇に力を入れてカ리를締め付け、そのまま引き抜きまた咥える。いったばかりではなおさら敏感であろう亀頭だけを、何度も何度も繰り返し。

ちゅばっ！ ちゅばっ！ ちゅぼん！

「ああっ！ あああっ！」

ちゅばっ！ ちゅばっ！

「あ、あ、あ……」

コータの体がかくかくと揺れた。

「あ……だめ、あ、あ、あ……だめ、だめ、だめ」

その声はおびえているようにも感じられた。しかし立江は動きを止めない。

ちゅばっ！ じゅばっ！ じゅるっ！

「あ……あっ、あっ、ああっ！」

コータは目を見開いていた。きつと与えられる刺激が強すぎ、受け止めきれないのだろう。腰が引け、体が小刻みに震えている。それでも「やめて」とは言わなかった。

じゅぼ、じゅぼ！

「あっ、あっ、あ、あ、あ、だめ、だめ、だめ……ああああ！」

立江が力を溜めるように数拍動きを止めてから力強く引き抜くと、まるで吸い出されたかのよ

うにペニスから真っ白なものが飛んだ。絶頂とともに体内に残っていたミルクを弾けさせたのだ。  
「あ……あ……あ……」

「おっと」

ミルクが出なくなると、立江はすぐにまた亀頭だけを咥えた。その瞬間、コータの苦しそうな悲鳴が上がる。

「あああああああああああああ！」

今度は拒絶していた。立江の額に両手をつけて引きはがそうと暴れている。しかし、立江は鍛え上げられた太い腕でコータの細い腰を掴んで離さない。

「あああああああああああああ！」

よく見ると、立江の喉が動いていた。コクンコクンと何かを必死に飲み込んでいる。

「あああああ！　あああああああああ！」

コータの声が濁った。泣いている。精管にチューブを入れられ直接精子を吸い取られても泣かなかったコータが。

~~~~~

トレーニングルームは先ほどよりもさらに人が増えていた。朝よりも午後、夕方の方が混むのだろう。

「では次は……射精は最後にしたいので、腕立て伏せをしましょうか。できますか？　腕立て伏せ」

「えっと……多分」

自信がなかったのは、スクワットで痛い目を見たからだ。できると思っていたのに、南に言われた通りにしたらほとんどできなかった。だから腕立て伏せも、できる気であると同じことになりそう。

「では最初は膝をついてやってみましょう」

案内されたところにはフロアマットが敷かれていた。かなり広い。そしてそこには数組の先客の姿があった。

「まずは見学してみましょう」

一番手前で腕立て伏せをしていたのはSコースの男性だった。しかしその下、男性の顔の下に陰部が来る場所で全裸の男の子が仰向けで寝転び、自らのペニスを立てるように支えている。

「あっ……あんっ！　……あっ……あっ！」

（わ……）

男性は、体を下げる度に男の子のペニスをしゃぶっていた。

「あっ、あっ……」

聞こえてくるじゅぽ、じゅぽ、といういやらしい音。筋力のある男性は安定した動きで上下運動を繰り返し、男の子のペニスの根元から先端までしっかりと口を含み、刺激していた。



「あの、南さん……？」

「フェラチオ、ですね」

やはりそうだった。こないやらしいトレーニングなんて——でも、今まで見学・体験してきたものはどれも全ていやらしかった。だからこれに限ったことではない。けれど、やはりいやらしい。

「あつ、あつ、いつ」

「……疲れたな」

「あつ！ やあつ！」

男の子がイくと言いつつになった途端、男性は動きを止めて膝をついてしまった。そのまま膝立ちになり、筋肉をほぐすように肩を回している。

「やあ……」

男の子はまだ自身のペニスを支えていた。小さなペニスだ。それでも完全に勃起していることが分かるほど、ガチガチだった。

「少し休憩をしようかな」

「や、やだ、お願いしますっ」

「もう腕がつりそうだよ」

それが嘘だというのは朔にも分かった。いや、男の子をいじめるためにわざと分かりやすく言っているのだろう。

「やあ……」

「さあ、次はお尻を鍛えようかな。最近少し肉が垂れてきた気がするね」

男の子は射精を奪われ、泣きそうな顔になっていた。しかし仕事だからか、渋々体を起こして立ち上がる。

「ご利用ありがとうございます……」

「うん、またあとで来るね」

「はい、お待ちしています……」

なんだか切なくなってしまった。きつとイきたくて仕方ないだろうに、仕事だからとこらえている。つらいだろう。本当は自分で扱いてしまいたいだろう。でもきつと、「またあとで来る」と言われた以上、そうすることはできないのだ。

「朔くん、」

「かわいそうです」

「そうですね。でもそれが仕事です。それにきつと、次はちゃんとイかせてもらえんと思いますよ」

南はそれ以上言及するつもりはないようだった。腰に手を添えられ、歩くように促される。

「奥の二人を見てみましょう」

「はい……」

もしかして南もそういうことをする——のだろう。するとしたらSコースだと言っていたし、

朔の体を使ってトレーニングしたいとも言っていた。でもあんな風に放置されたら寂しくて切なくて、きつと泣いてしまいうだろう。おちんちん弄つてと南に縋り付いて懇願してしまうかもしれない。

「――どうしました？」

「いえ……南さんにもあんな風に放置されちゃうのかなって思ってた」

「私？ ああ、いえ……そうですね、しない、とは言えないですが放置はしませんよ。トレーニングはインターバルが必要なので、例えば腕の次は腹筋、足腰という風に移っていくんです。朔くんの体をお借りするときほどの部位も全て朔くんに相手をしてもらうつもりでいるので、朔くん自身を放置ということにはなりません」

「でも射精は……」

あんな風に焦らされるのだろうか。

「それは許す日もあれば許さない日もあるでしょう。そのときの気分次第です」

「そんな！」

「でもきつと朔くんも楽しめると――ああ、あちらを見てください」

話を逸らされたと思ったけれど、どうやら男の子がトレーニングを始めるところのようだった。ひとまず今は見学だとそちらに意識を集中させる。

その二人組は壁際にいた。腕立て伏せをする男の子と、その体の下を覗き込んでいるトレーナー。一体何をしているのか、遠目ではよく分からなかった。

「もう少し近くに行ってみましょう」

南は遠慮なくトレーナーのすぐ前――男の子を挟んで――に腰を下ろした。そしてトレーナー同様、男の子の体の下を覗き込む。

「あつ、あつ、あつ」

男の子は腕立て伏せをしながら喘いでいた。どうしたのだろうかと南を做って腰の辺りを覗き込むと、床の上にはテニスボールサイズの柔らかそうなものがあった。

（あ……これ……!）

それは最初に行った腕を鍛えるところで見たものだった。確か手首をほぐすなんて言って、亀頭に被せて撫でるように回していた、あれだ。トレーナーは片手でそれを支えている。そして男の子が体を上下させる度、テニスボール大のそれが男の子の亀頭だけを咥え込んだ。

「イケそうでしたらイってしまってもかまいませんよ」

「あつ、あんつ、あつ、むり、む、りっ、あつ！ ああつ！ もう、もう無理ですっ!」

男の子の腕が震えていた。でもまだ十回もしていない。きつと亀頭だけを刺激される快感により、体に力が入らないのだろう。

「おちんちんの先っぽ、くちゅくちゅされるの好きでしょう？ もう少し頑張りましょう」

「あああ……!」

男の子はぶんぶんと首を振った。本当にもう無理だと告げたいのだろう。しかしトレーナーは「先っぽ、好きじゃなかったんですか」とわざとらしい声で言った。

~~~~~

「では腕を休ませている間に腰の運動に行きましょう」

使う部位を変えていく——それは南自身もそうしていると行っていたけれど、頭の中は気持ち良くなりたいという思いでいっぱいだった。でも気持ち良くなれば何でもいいというのではなく、引き続きペニスを刺激して、射精したい。

案内されたのは腰より少し低い位置にオナホールが設置された器具だった。見るだけで使い方が分かり顔がにやけてしまう。

「朔くんのおちんちんの高さだと……」

こちらに穴を向けたオナホールの前に立ち、高さの調整が終わるのを待つ。

(恥ずかしい……)

もう、今日何度そう思っただろう。勃起をさらし、興奮を見せつけ、射精の許しを乞う。朔自身もしたし、同じようにしている人を何人も見た。

「——朔くん、一度おちんちんを入れてみてください」

「はい」

腕立て伏せでだるくなった腕を上げペニスを掴む。ホールの位置がペニスよりも少し低いので、腰を落として押し込んでみる。唯一疲れを見せないそれは、すでに中に入れられていたローションの力を借りてゆっくりと新しい世界に入っていた。

「ああ……」

熱い息が漏れた。すごい。すごく気持ちいい。

「良さそうですね」

「はい……すごく気持ちいいです」

手をするのとは全く違う快感。オナホールは今日三度目だけれど、ずしりと重いオナホールとも、亀頭だけしか咥えてくれないオナホールとも感触が違う。

「ではゆっくりと腰を振りましょう。腰を振った経験はありますか」

「ないです」

「では抜けてしまわないようにペニスの長さとおナホールの位置を意識しながらやってみましょう」

呼吸もゆっくりですよ、という注意に頷き、はやる心を抑えるために深呼吸。

「そう、いいですね。では動きましょう」

「はい……んっあ……」

ねつとりと褻がからみつくような感触だった。小さな突起がペニスを細かく舐めるような快感。

「そう、上手です。おちんちん気持ちいいですね」

「はいっ、んっ、あっ」

気持ちいい——しかし、太ももが痛い。

「あ、あ……」

息が上がる。痛い。入れたときは何とも思わなかったのに、あつという間に中腰がきつくなってきたしまった。

「うあああ！」

痛い。ふるふると震えてくる。しっかりと膝をまつすぐにして足腰を伸ばしたい。しかしペニスは抜きたくない。

「あ、あ！」

痛い苦しい痛い。このままだと転んでしまう、と思ったところで思い切りペニスを引き抜き、かばうように腰に手を添え背中を逸らす。

「つらいですね。でもおちんちん気持ちいいでしょう」

「はい……でも足が……」

体を伸ばせば楽になる。しかし、少しでも中腰に戻すとまたすぐに震え始めてしまう。

「もう一度、次は五回腰を振ってみましょう」

「や、そんな……」

ただのオナニーだったら五回だけなんて、と思ったことだろう。でも今はその五回が苦痛ではない。

「おちんちん、中に入れてあげないとかわいそうですよ」

「あ……」

「ほら、見てください」

南に示されたのは二メートルほど離れたところに設置された台だった。今朝がしていたように、男性が器具の前で腰を振っている。しかし、それは朔が使っているのとは違っていた。オナホールが設置されているのではなく、裸体の男の子が立ちバックの体勢で設置されているのだ。

「あ、あ、ああ……！！」

「ああ……すぐよく締まる。すぐにイってしまいそうだよ」

男性はもったいぶるようにゆっくりと腰を回した。それがどうやら男の子のイイトコロに当たっているようで、ぐるんと腰が動く度に気持ち良さそうな声を上げている。

「ああ、そうだ、腕も一緒に鍛えようと思ってたんだ。筋肉もそうなんだが、リズム感が少し悪くてね」

何が始まるのか——自分でも驚いたけれど——それだけでもう分かってしまった。しかし男の子は何が始まるのか分からないのだろう。「ひい」という声を上げ、お尻を揺らした。

「ほら、好きだろう？」

「あっ！」

男性は男の子のアナルにペニスを挿入したまま、用意してあったらしいオナホールを無防備なペニスに添えた。

「あ、あっ！」

ゆっくり……かなりゆっくりオナホールをはめていく。

「ほら、おちんちんが食べられてくよ」

「あ、だめえ、おちんちん食べちゃだめえ！」

「ん？ どうしてダメなのかな」

「だってえ！ 白いおしっこ出ちやうからあ……！」

白いおしっこ——精液の呼称ということは分かったけれど、そんな言い方を聞いたのは初めてだった。

「白いおしっこでも黄色いおしっこでも、何でも出してかまわないよ」

「やだあ！ お漏らしやだあ！」

男の子は必死に首を振ったけれど、男性はとても嬉しそうに笑っていた。いじめるのが楽しくてしかたがないのだろう。

「さあ、俺はリズム感も一緒に鍛えられるように頑張るよ」

男性は男の子の「いや」を無視して腰の前後運動を再開させた。

~~~~~

——結局、射精に至ることはできなかった。何度もいく直前まではいけたのだ。しかし、どうしてもあと少しというところで太ももが悲鳴を上げ、断念せざるを得なかった。

「やああ……」

床に崩れ落ち、俯く。ペニスは腫れ上がったように真っ赤で、ローションとカウパーでたらと光り、あとほんの数秒の刺激で射精できるところまでできているのに。

悔しいし、苦しかった。もっと体力があれば、きっと射精できたはずなのに。

「朔くん、部屋に戻りましょうか」

「あ……」

「それとも、もう一度最初にしたオナホールコーナーに戻りますか？」

「あ……重いやつ……ですか」

「はい」

きつと、これは情けだ。今日が初めてだから、体験だから、甘やかしてくれているだけ。だって今日見た他のトレーナーはそんな甘い言葉を吐いていなかった。視線は愛情たっぷりだったのにとっても厳しくて……でも、会員の男の子は一所懸命頑張っていた。頑張って、ちゃんと射精していた。

「……いえ……戻ります」

自分だけが甘やかされるのは嫌だったし、何より腕立て伏せでもう腕に力が入らなくなっていたのだ。重いオナホールでペニスを扱っていくなんて、到底できそうになかった。

「分かりました。では戻ってシャワーを浴びましょう」

限界でしょう、と言って南はすつと抱き上げてくれた。安定感のある腕。落とされるかもなんて不安は一切生じない。

「……南さん……」

首に腕を回すと、ふわっと南の雰囲気が軽くなった。

「どうしました」

「……すみません」

「え？」

「上手にできませんでした……」

南の本業はトレーナーではないと言っていたけれど、それでも今日の業務がトレーナーであることには変わらない。きつと、会員の様子を見極めながら射精までさせるのが仕事なのだろう、となんとなく思ったのだ。これくらいなら射精できると考えてのトレーニングメニュー。けれど朔はそれをこなすことができなかった。南の期待を裏切ったようなものだ。

「お上手でしたよ。とても頑張りましたね」

「でも射精できませんでした……」

「この目標は射精ではありませんよ」

あてがわれている個室に入ると、南はそのまま浴室に入った。簡素なシャワールームかと思っていたけれど、まるで温泉のように広い浴槽つきで、洗い場にはエアベッドが敷かれていた。そこに優しく寝かせてもらい、南が裸になるのを待つ。

「おまたせしました」

裸は見られなかった。だって確実に興奮してしまうから。上手にできなくて申し訳ない気持ちでいっぱいなのに、南の裸体に興奮するなんて——それに、気分が落ちているせいかもしれない。体を見たいとも思えなくて。

「さあ、汗を流しましょう。石鹸やシャンプーで肌が荒れたことはありませんか」

「大丈夫です……」

そこまで気にしてもらえるなんて——そこまで気を遣うプロに一日ついてもらったのに、全然上手にできなかった。

「——朔くん」

背けていた顔を向けると、南は困ったように笑っていた。

「朔くんの射精が見たかったのは本音です。でも、射精できなくて苦しいと訴える朔くんがとても可愛くて、途中からは射精させたくないなと思っていました」

（……嘘だ）

それは南の優しい嘘。朔が気に病まないようにという気遣い。

「射精、できなくて苦しいですね」

「はい……」

「きつと帰宅しても今日のことを何度も思い出すでしょう。射精したくて、ペニスを握ろうと思うでしょう」

「っ……」

みんな、誰だってそうなる。なのに、まるで朔が淫乱だからそうするだろうと言われているみ

たい。

「そのとき、きっと私のことも思い出してくれるでしょう?」

「え……?」

「それは朔くんの部屋、プライベートな場所……例えばベッドの中でも、朔くんの中に私がいるということでしょう」

「あ……」

「もっと私でいっぱいになってください。いつでも私のことを考えていてほしい」

「南さん……」

言われなくてもそうなる。だからこそ、告白されたときに戸惑ったのだ。仕事に集中できなくなるから。でもきつともう手遅れだった。あのとき何も言わなくても——言われなくても、きつと朔の頭の中はずっと南で満たされることになっていたと思う。

「射精しなければ、ずっと射精願望が続くでしょう? 少なくともその間は私のことを思い出してくれる、と思いました」

(もしかして、本当に……?)

~~~~~

「朔くんの髪は柔らかいですね」

「細いんです。それに少しくせ毛でふわふわしちゃって」

「可愛らしいですよ」

髪の手入れを終えると次は体だった。泡で出てくるタイプのボディソープをたっぷりと手に出し、指先を撫でられる。

「あ、の……?」

「はい」

「手で……ですか」

ボディタオルで「ごしごしと擦るのではないのか。まさか手で全身洗われるのだろうか。

「はい。きれいな肌に傷がついたら大変ですから。それに朔くんのことは全て触れて知りたいんです」

ボディタオルで洗う方が確実に早いし楽だ。なのに、南は古傷さえ見逃すまいとするかのように丁寧に肌を撫でていく。

「んっ……」

腕も肩も気持ち良かった。けれど、南の手が先に進むに従ってむずむずが再発してしまい苦しくなる。

「乳首……たくさん弄ってあげる約束でしたね」

「っあ!」

上体を起こされ、背後から抱きしめるように乳首に両手を伸ばされた。くりくりこりこりと、

すでに硬くなってしまっている乳頭を捏ねられる。

「あっ、あ、あっ」

せっかく射精欲が落ち着いていたのに。乳首を揉まれるとそれだけでペニスは力を持ち直し、焦らされた分を取り戻すようにカウパーを垂らしてしまう。

「あっ、ん、あっ」

気持ちいい。もつとしてほしい。人差し指で乳頭をぐりぐりと回され、指先が離れたと思ったらぐつと乳輪に押し込むように潰されて。ぽこつと形を戻すと、褒めるように先端を擦られる。

「ああっ！ ああっ！ みなみ、さんっ！」

「はい。どうしましたか」

「やあ！ もうっ！ イきたいっ！」

「いけません。今イってしまったら家に帰ってから射精したいと思わないかもしれないでしょう」

「やあ！ そんなことっ！」

絶対にない。だってこんなに気持ちいいことをたくさん知ってしまったのだ。他人に触られる快感も、見られる快感も、愛される快感も——どれも、今まで知らなかったこと。

「苦しめてしまっていることは分かっています。でもさっき言ったとおり、今後朔さんの射精は全て私の前で行ってほしいんです」

「あっ、あっ！ ならっ！」

今させて、と言うと乳首を弄る手が止まった。

「あ……なんで……」

乳首が疼く。もつとしてほしい。刺激がなくなって寂しい。つらい。射精したいのでペニスも弄ってほしいけれど、左右どちらの乳首も弄っていてほしい——でも、どこも弄ってもらえない。

「や、南さんっ！」

「すみません……でも、まだ射精してほしくないんです。もつと射精したいと言う朔くんを見ていたい」

「っ……」

本気なのだ。南は本当に射精を望む姿が好きなのだ。

「やあ……」

射精したい。なのにさせてもらえないなんて。

「可愛いです。射精したいんですね？」

「したいっ！ したいですっ！」

素直に認めて領くと、耳元に「はあ」と熱い息がかかった。

（あ……興奮……してる……？）

今日たくさんいやらしいことをしたけれど、一度だって南の興奮を感じたことはなかった。でも今は、興奮してくれているのかもしれない。

「南さんっ、射精、したいっ」

もつと興奮してほしかった。射精したいと懇願することで南が興奮するのなら、今すぐ射精で



きなくてもかまわない。

「ああ……朔くん……本当に可愛い……おちんちん、ずっと射精させてもらえなくて苦しいですね」

「うう……苦しいです……」

「おちんちん、壊れてしまいませんか」

「やっ……!」

南の言葉は、朔に求めている言葉そのものだと思っていた。でも壊れるなんて——もし認めたら、本当に壊れるまで射精を許してもらえなくなってしまうのでは、と怖くなった。

「朔くん、おちんちん、壊れそうになっていませんか」

「あ……あ……」

重ねられた質問。頷いてもいいのだろうか。

「や、南さんっ」

「まだ……大丈夫そうですね」

「っ! や、ダメ、壊れちゃいますっ! このままじゃおちんちん壊れちゃうっ!」

壊れるまで焦らされてしまうかもしれない恐怖と、まだ大丈夫と誤解されて焦らされ続けるかもしれない恐怖——どちらも結局イかせてもらえないことは同じなのだけれど、大丈夫と思われる方が怖かった。

「そうですか……朔くんのおちんちんは壊れてしまいそうなんですね」

必死に何度も頷いた。もうだめだから、一度でいいからとりあえずイかせてほしいとごちやごちやの頭で思いつくまま言葉にする。

「やあっ! おちんちんがっ!」

「可愛い……本当に限界そうですね」

「はいっ! もうっ……!」

腰の辺りに添えられていた手が肌を這った。ゆっくりと上がってきて、勃起したままの乳頭をきゅっつつまむ。

「あっ!」

「ああ……乳首もこんなにして。えっちですね」

「あ、あ……」

乳首で気持ち良くなれると知ったのは今日が初めてだった。なのにもう、立派な性感帯になってしまった。中途半端に弄られるとむずむずするし、弄られている間は体の中を通して快感がペニスに直結しているように感じられる。それくらいとても気持ちがいい。

「気持ちいいですか?」

「あんっ、は、いっ! きもちっ」

本当はペニスを握ってほしい。でもそれがもらえないのなら乳首だけでも——でも射精欲は高まっていくばかりで苦しくて。

「ああっ!」

きゅっきゅとリズムミカルに、潰すようにして揉まれた。血が止まり、またすぐに通いだす。それに合わせて勝手に腹筋にも力が入る。

「あつ、あつ」

「――さあ、では洗うのを続けましょうか」

~~~~~

「……お、オナニーのとき……皮、で、その……」

もうこれ以上は許して、と念じながら言葉を切った。しかし南はあとを引き取ってくれない。じつと黙ったまま、視線で続きを促してくる。

「……皮、で……おちんちん……擦りました……」

初めてのときからそうしていた。皮オナはよくないと話には聞いていたけれど、どうせ一生人に見せることもないしと気にしていなかった。もう長いこと誰かを好きになるようなこともなく、好きになったとしても交際できるなんて夢にも思っていなかったから。だから皮が伸びようと感じ度はどうかなろうとどうでもよかった。ただただ快感を求めただけ。

「そうですか。皮でくちゅくちゅしていたんですね」

「っ……は、い……」

どうしてこうわざわざ恥ずかしい言い方をするのだろうか。しかも全てが朔の興奮を高めていて――まるで、なんと言えば朔の体が悦ぶか知っているかのよう。

「では、皮を剥いてみましょう。朔くんが剥いてみてください」

「え……」

してくれないのだろうか。してほしい――だって、自分でする方が恥ずかしい。

「中のお顔を見せてください。それとも、皮を剥くだけでイってしまいそうですか？」

「や、そんなことは……」

でも、中を南に洗われるのは怖かった。自分で洗う時だって、刺激が強すぎてびくつとしてしまっているのだ。

「あ、あの……その、き、とう、は、ちよつと……」

せめて自分で洗いたい。そう告げると、南は緩く首を振った。

「いけません。ここでは私の仕事ですから。それとも亀頭に触れられるのが怖いんですか」

「……はい。すみません、南さんがどうとかわかっていうんじゃないくて、敏感で」

誤解しないでほしくて口早に告げると、南は朔の陰部に視線を落とした。じつと、目を細めて見つめられる。

（そんな見ないで……）

隠すために手を伸ばそうとしたとき、南がふつと息を吐いた。

「そうですね。こんな風にずっと守られていたら、中の子は敏感になってしまいますね」

「っ……」

包茎、とわざわざ遠回しに言われたのだとすぐに分かった。

「でもお外に慣れさせてあげましょう」

「あ、や……」

南の手がそそり立つペニスを持った。怖い。剥かれてしまう。

「や、やだ、こわっ」

「怖くありませんよ。まだ亀頭には触れません。見せてください」

「……本当ですか」

「はい。いきなり触ったらおびえさせてしまいそうなので」

「……はい」

上げた手を下ろすと、南がゆっくりと撫でるようにして皮を下ろした。ぬるつとした感触と共に亀頭が露出していく。

「ああ……」

出てしまった——普通なら出ているべきなのに、外の世界に不慣れすぎて怖い。

「可愛い……とてもきれいなピンク色ですね。毎日皮で撫でてあげているからでしょうか」

「っ……」

今度は皮オナだ。遠回しに、でもわざと恥ずかしい言葉を選んで言い聞かされている。

「今日もよく頑張りましたね」

じつと、亀頭を見ながらの言葉。今南が褒めているのは朔ではなく亀頭なのだ。ずっと隠れていただけの亀頭。何もしていないのに。頑張ったのは朔なのに。

「や……」

「朔くん？」

思わず低い声になってしまったからだろうか。南が不思議そうな顔で朔を見た。

「亀頭は何も頑張ってないです……」

ただ隠れて、安全なところから快感を得ていただけだ。確かに射精できず苦しかったけれど、苦しいと感じたのは亀頭ではなく朔の方。

南が目を細めた。

「——朔くん、よく頑張りましたね」

「あ……」

「本当に、とてもよく頑張りました。初めての環境で、みんなに見られながらよく勃起できました。それに、トレーニングもとてもよく頑張りましたね」

「南さん……」

分かってくれた。朔が、亀頭に嫉妬したのだと分かって、でもそれを馬鹿にすることもなく、求めている言葉をくれた。

「すごくいいこでした」

頭を撫でられたら、もうとろけてしまった。もう一度体中撫でてほしい。全身、たくさんその手で愛してほしい。

「南さん……」

「はい」

「……………」も……」

「朔くん？」

「……何も撫でて……」

勃起を支える南の手に触れると、南は目を瞬かせた。

「朔くん……いいんですか。怖いんでしょう」

でも、驚いた顔は一瞬だった。すぐにふわっと柔らかくなり、嬉しそうに目を細める。

「無理しなくていいんですよ」

「……怖いけど……もつと南さんに撫でてほしいです」

本当は体中撫でてほしかったけれど、まだ体を洗い終えていない。それに——お付き合いするのだから、これからいくらだってチャンスはあるだろう。

「分かりました。では、ここも汗をかいていると思うのできれいにしましょうね」

南の手のひらが亀頭の上にかぶさった。やっぱり怖い。ぎゅっと目をつぶり拳を握る。

「あ……」

泡を転がすように手のひらが動いた。まるでテレビコマーシャルで見る「泡で洗う」みたいだ。南の手の感触は全く感じなくて、ふわふわとした泡が亀頭をくすぐるだけ。

「あ、あつ」

気持ちいい。泡の感触もだけれど、なんだかとても大切にされているような気持ちになる。

「痛くありませんか」

「んっ、はいっ、きもちっ、です」

しゅわしゅわ消えていく泡の感触。ゆったりとした手の動き。気持ちいい。でも、普段こんな洗い方はしないので、これで本当にきれいになっているのかが分からず、むずむずする。

（でも力強くされたら怖いし……）

敏感だからと言ったのは朔だ。南はそれを考慮して優しくしてくれているだけだというのに、洗えているか分からないなんて言い方はできない。まあ、家に帰ってからしっかりと洗えばいいのだけれど——自分は甘えたいのだろうか。怖い、優しくしてほしい、でもちゃんと洗ってほしい——全てわがまま。でも、南にそのわがままを言いたかった。

「さあ、これでいいです。きれいになりましたよ」

「あ……」

終わってしまった。でも、やっぱり南にちゃんと洗ってほしくて。いや、洗ってほしいというより、わがままを叶えてほしかったのだ。そうやって南の愛情を感じたかった。

「ん？　どうかしましたか」

「……もつと……」

「え？」

「もつと……強くしてください……」

恥を忍んでのお願い。おねだり。

怖いんでしょう、敏感すぎて擦ったら痛いんでしょう——そう言われるだろうと思ったし、でもそう言われたらなんと返せばいいかも分からないまま目を閉じていると、突然の刺激が亀頭を襲った。

~~~~~

「さあ、オムツをしましょうね」

「えっ?」

見せられたのは確かに真っ白なオムツだった。でもどうして急に——質問をする間もなく、南は足元に座ってしまった。

「朔くんは可愛いのでとてもよくお似合いになると思います」

嬉しそうに言われても、どう反応したらいいか分からなかった。だってオムツなんて普通元気な大人が使うものではない。

「さあ、腰を上げましょうね」

そう言われても、戸惑いから体は動かなかった。でもそうすると予測していたのか、お尻の下に差し込まれた手がぐっと腰を持ち上げてしまう。

「わっ」

「軽いですね。もう少しウェイトを増やさないと抵抗しても簡単に封じられてしまいますよ」

「……抵抗したくなるようなことするんですか……」

訊いておきながら、心の中では嫌だなんて微塵も思っていないかった。

「抵抗は……そうですね、朔くん次第でしょう。でもオムツはMな子全員がすることですよ」

「え、そうなんですか」

「はい。良質な睡眠をとるためです。寝ている途中に尿意で起きるのは嫌でしょう。もし尿意で起きたにしても、トイレまで行って戻ってくれば目が覚めてしまいます。それを避けるために、ここではオムツをして眠っていただいています」

「徹底しているんですね」

オムツは恥ずかしかったけれど、ようは尿意を感じなければいい話なのだ。幸い、といていいのかは分からないけれど、さっきお漏らしをしてしまったことで尿意は全く感じられないし、まさかこのあと八時間以上の睡眠をとるということもないだろう。仮眠程度なら尿意を気にすることすらないはずだ。

「ちくちくしませんか」

「大丈夫です」

南は慣れた手つきでオムツをあてた。テープタイプのように、きつすぎないかを確認してくれている。

「では、途中尿意や便意があればそのままオムツに出してくださいね。基本的に帰宅時間の指定

があるときを除いて、規定の時間眠っていただくことになります。もし途中で起きてしまっても、そのままベッドから降りずに体を休めていただくことになっておりますので」

「分かりました。ちなみに何時までなんですか」

今の時間は夕方四時。夕食も言っていたので、寝るのはせいぜい二時間か三時間程度だろう。「夕食は十九時を予定しているのですが、普段の朔くんの生活ペースに合わせた方がいいでしょうか」

もうオムツは終わったはずなのに、なかなか南は隣に来てくれなかった。早くぎゅつとしてほしい。昨日まではハグされた経験もなかったというのに、もうすっかり南の体温がないと安心できない体になってしまっていた。

「いえ、何時でも大丈夫です」

「分かりました。明日の仕事は……」

「十時頃家を出ます」

「分かりました」

南が再びベッドから降りた。でも今度は遠くまで行くようなことはなく、朔の場所からは死角になっていたベッドわきの冷蔵庫を開けた。

「では寝る前の水分補給をいたしましょう」

「……え」

見せられたのは哺乳瓶だった。赤ちゃんが使うような、小さなもの。

「出やすいタイプなので、初めてでもちゃんと飲むことができますよ」

オムツというだけで戸惑ったのに……オムツに比べたらマシなのだろうか。いや、どちらも衝撃は大きい。

「さあどうぞ」

首の後ろに腕を差し込まれ、軽々と上体を起こされる。でも自分で座らされるのではなく、まるで本当の赤ちゃんを抱えるようにそのまま支えられ続けて。

（すごい……）

ドキッとしてしまった。だってこんなに軽々と支えられるなんて。

（かっこいい……）

どうしよう。かっこよすぎてぞくぞくする。

基本的にはずーっとこんな感じのエロです。

全編におけるタグ

腸内洗浄、視姦、オナニー、オナホール、強制絶頂、焦らし、羞恥、潮吹き、言葉責め・おむつ・サーバー飲尿・ディルドスクワット・精液吸引・性給仕・亀頭責め・失禁・視姦・焦らし・射精管理

肉体改造エクスタシー ―後編サンプル―

gooneone (ごーおんおん)

2020/12/12

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: gooneone

